

転生先はブラック鎮守府の雪風でした

香月燈火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球の日本という国で暮らしていた青年、雪波風斗という青年は異世界へと転生した。

それも、艦これの世界に存在する軍艦の化身、艦娘の雪風へと。

しかも、転生先はブラック鎮守府。これから先、地獄の生活が始まる……待てよ？ これなら俺の欲求も満たせるのでは？

愉悦を糧にブラック鎮守府の中でも一際ブラックな生活を始めて2年、鎮守府に転機が訪れた――。

これは、何処か壊れた転生者である雪風と、同じ鎮守府の仲間達によるお話。

※注意書き

- ・これは読者が「愉悦」して雪風が「愉悦したい」作品です。
- ・視点は基本的に雪風と提督のものがありますが、温度差が凄いです。
- ・かなりの勘違い要素があります。双方向どころかあらゆる方面から勘違いしたりされ過ぎててもはやどこぞの高速道路みたいな絡まり方をしています。
- ・シリアス要素はありますが、シリアスになりすぎることはないです。鬱要素も描写的にはありますが、鬱にはなりません。
- ・最終的にはハッピーエンドになります。

目次

雪風は愉悦がしたい (プロローグ)	
転生先は雪風。性転換した上にブラック鎮守府でした。	1
提督、ブラック鎮守府の現状を知る (提督 side)	8
何かが終わって、何かが始まっていた朝	18
かつて幸運艦であったもの (提督 side)	28
雪風の生きる理由	39
雪風は交流を愉しみたい	
雪風は何色にも染まらない	49
提督さん、雪風はこちらです (提督 side)	59
敵襲と、単騎の雪風	72
大本営の雪風 (提督 side)	83
泡沫の夢 (三人称 side)	91

雪風は愉悦がしたい（プロローグ）

転生先は雪風。性転換した上にブラック鎮守府でした。

俺の名前は雪波風斗^{ゆきなみかざと}。

もとい、舞鶴第三鎮守府所属の陽炎型駆逐艦八番艦雪風という。

何を言ってるか全く意味が分からんとは思うし、正直なところ、俺にも全くと言ってもいいくらい分かっていなかったりする。

ただ言えることといえば、既に雪波風斗として生きてきた俺は肉体的に死んでしまっていることと、前世とは全く違う世界で、雪風として生まれ変わり……つまり転生してしまったこと、そしてこの世界が、前世ではゲームだった【艦隊これくしょん】……通称【艦これ】という作品の世界であるということだ——。

駆逐艦雪風とえば、第二次世界大戦から戦後以降を長きにわたって活躍し続けた知る人ぞ知る日本の駆逐艦を思い浮かべることだろう。

この世界、艦これ世界においてもこれら艦歴においては例に漏れないように、ただひとつ違うことと言えば、前世と同様戦後数十年が経過しながらもこちらには前世には存在しなかった人類の敵とも言える存在、深海棲艦と言われているものが全世界の海に跳梁跋扈しており、またそれと対をなす存在として、かつての大戦時にあらゆる国々で活躍した軍艦が擬人化した存在……艦娘と呼ばれる存在が居ることだ。

まあ、もうこの時点で俺の冒頭の挨拶の意味が理解出来ることだろう。

そう、俺はこの世界において人ではなく、なんと艦娘として生まれ変わってしまったというわけだ。

前世では特に紹介する部分もない、強いて言うなら有能な妹を持つ

だけのただの男が、どういうわけか転生どころか性転換までしてしまつたことには最初はびっくり仰天といったものだ。

しかもよりによって艦娘でも比較的幼い容姿を持つ駆逐艦の中で一際幼げな雪風だ……つるぺたすとーんで見た目の可愛らしさを振りまきながらも快活なボイスは自然な愛嬌を感じさせ、更にはいざ出撃の際には奮激の活躍を見せるギャップにより、上から下までありとあらゆる提督ロリコンを虜にしてきた。

実際俺もその一人であり、ゲーム内ではしつかり指輪まで渡している。

とはいえ、やっぱり自分がそれになりたいかと言われると別問題としか言うほかない。

確かにゲームでも使い所の多かつた雪風だが、装甲に関してはやはり駆逐艦というだけあって相当に脆い。

ゲームでは大破状態で進撃でもしない限りは沈むこともなかったのですが、それほど慎重な運用は必要もなかったが、これが現実となると流石に及び腰になるといふもの。

2年前、ここ、まいちんで建造されてからというもの、俺はまともな海に立つことすら出来なかった……。

……なんてこともなく、むしろバリバリの主力艦の一隻だったりするんだよね。

というのも、俺の意向も少なからず含まれてはいるものの、それ以上にはここでは上司である提督に艦娘が逆らうことが出来ないからというのが理由だ。

なにせ、ここまいちゃんは俺の前世での艦これネタにはよくあるネタである最低最悪な環境、いわゆるブラック鎮守府だったのだから。

捨て艦なんて当たり前、典型的な大艦巨砲主義で駆逐艦のような低火力艦は戦艦の肉盾、戦艦や空母の物量で押し切ることこそ正義、そんなことをさも当たり前のように言つてのけるのがここの提督だった。

もはや毎日のように駆逐艦や軽巡といった軽量艦が沈んでいた以前と比べて多少はマシにはなったものの今でも昨日まで顔見知りだった艦娘が気付けば居ないなんてことは当たり前。

新造艦なんて1年どころか、大体数ヶ月もつかどうかレベルで沈んでいった。

そんな中で駆逐艦である俺がここの主力として生き残れているのは、駆逐艦の中でも群を抜いて生存能力や護衛能力が高かったのと、俺自らが提督に嘆願して他の駆逐艦が入る枠を常に入れてもらうための最優先権を貰うことが出来たからだ。

事実、自慢ではないが、俺が参戦した海戦では普段よりかなり損害が減っている。

流石の提督もただ肉盾として連れて行くよりも損害を軽微にした方が良いという事は理解しているようで、この優先権についてやその他様々の申し出という名の嘆願を受け入れてくれた。

上の以前と比べて、というのは、俺が他の沈むかもしれない駆逐艦の出撃枠を掠めとつたことで沈む可能性が減ったからだ。

本来なら戦いを生業とする基礎本能を持つ艦娘がこんな栄誉の横取り紛いなことをされて不満を持たないはずがないのだが、明らかに無茶を超えて肉盾を強要されていることが分かるような出撃には否定的であり、むしろそれを毎度奪っていく俺には同情の視線ばかりが集まっていた。

もちろん俺の身は一つしかない上に出撃も1編成のみと限ったわけではないのだから気休め程度にしか減ってはいないのだが、減ったことには減つたのだからやはり代わって正解だったと思う。

さて、おかげで毎日生傷と精神的疲労の絶えない生活を送る俺だが、実はこれには仲間を助けること以外に、俺のとある特殊な嗜好も関係していた。

本当に、こんなことを唐突に言うのもなんだが、俺は人の不幸というのがとても好きだ。

付け加えるなら、自分に関係する事柄による罪悪感に付随した絶望感や、それに至る過程の悲哀の感情というものが大好物と言ってもいい。

つまりは、「俺が仲間の盾になって率先してことをやっているのに、自分は何もやってやれない。それどころか、恐れが高じていざ代わってやることも足がすくんで出来ず歯噛みしている」といった一例こそがまさに俺にとってのご馳走様と言っても良かった。

これが俗に言う愉悦というものなのだろうか。

とはいえ、だからと言って俺は取り返しをつかない不幸というのだけは人並みに嫌いだった。

「身体がボロボロになる」のはまだ良くても、「死ぬ」ところまで行ってしまおうと俺とて後悔が先行してしまいうわけで、過程の問題で不幸を見るのは良いが、結果としてバッドエンドにまで行ってしまふことはどうしても無理というわけだ。

その点で見るなら、やはり「人の不幸を代わりに受けることで逆に傷もなく不幸を与えている」のを眺めている今の立場はやはりとても美味しいと言ってもいい。

ただ、それでもやっぱ痛いのは嫌ではあるんだけども。

おかげで俺が色々と手を回したおかげで提督からの物理的な暴力や性処理まで全て俺の方に回ってきたからその分の痛みを一身に受けるようになったから痛みにはもはや無警戒になるくらいには慣れてしまったものの、痛いものは痛いのだ。

俺の嗜好のためでもあるとはいえ、その代償に男に犯されるという屈辱やクズみたいな輩に処女を散らされたのは流石にショックだったよ……。

今日も海域攻略のための出撃から帰ってきた俺は、入渠することもなく駆逐艦寮の廊下を歩いていた。

主力艦とはいえ駆逐艦である俺は戦艦や空母よりも優先度は後回しにされてしまい、その入居時間を鑑みても俺に入渠が許されることはほとんどないのである。

放置していればずっと回復することのないゲームとは違い、現実世界となった今では一応軍艦の化身である艦娘とは言っても人の身であるから人間と同じ手当てでもある程度の治療が出来るのは幸いだった……今日は上手く小破で済みますことが出来たから、明日にはある程度は万全な状態で挑むことが出来るだろう。

まるで人気のない静かな廊下を進み、ついに俺の暮らしている部屋の前にやってきた。

「ただいま戻りました……」

「雪風ー」

恐る恐る入ると、俺と変わらない背丈の子によって部屋の中へと引っ張りこまれてしまった。

不安げに揺れる目で検分するように俺の全身の傷を確認しているこの子は俺とは同室のルームメイトであり、雪風との姉妹艦であり、犬の耳のような特徴的な髪型をした陽炎型の十番艦、時津風だ。

性格も本来の雪風と何処か似通っていて精神年齢も非常に幼く愛嬌のある子だが、生憎雪風である俺は元々身も心も青春真っ盛りな若気の青年であったため、まさしく残念な中身となってしまうていることにルームメイトとしても姉妹艦としても非常に申し訳なく思う。

「ああ、またこんなに怪我が……しれーには何もされなかった？ それより、また入渠しなかったの？」

「と、時津風……そんな矢継ぎ早に言わなくても大丈夫ですよ。しれえには何もされてませんし、今日は軽めの小破なので入渠もせず済みました。これくらいの怪我なら入渠しなくても問題ないですから……」

相も変わらず気の弱い様子なことで、若干涙目になっている時津風に苦笑しながら、少し雪風とは似つかわしくない大人ムーヴで対応す

る。

「が、こんな言い訳にすらなっていないような言い分でやり過ぎせるはずなどないわけで。」

「そんなわけないでしょう？　雪風、そろそろ怒りますよ？」

不意にそんな言葉を挟み込んできたのはもう一人の同室であり同じく姉妹艦……陽炎型二番艦、不知火が、不機嫌そうに時津風の背後で腕を組んで立っていた。

「し、不知火お姉ちゃん……？」

「全く……いくら艦娘が人間よりも丈夫とは言っても、入渠しなければそれほど治癒力が高いわけではないことくらいあなたも分かっているでしょう？」

やべえ……これ完全にガチ切れモードじゃん。

精神年齢が大分上なはずの俺がこんな子供に怖がるとはこれ如何に……いや、艦娘は見た目は当てにならないけども。

心配してくれているのはよく分かっているんだが、流石に出撃あがり疲れてるからこの精根尽き果てた状態で叱られるのは嫌だ……どうにかやり過ぎそう。

「大丈夫です。雪風は……沈みませんから」

全くもって根拠もない発言だが、雪風標準の口癖ではあるからここで言ってもおかしいことではないだろう。

そのまま俺は不知火の横を通り過ぎようとすると、不意に小さな手が伸びた。

「雪風……!？」

不知火によって腕を掴まれるも、何かに驚いたように目を見開いた隙に腕を振りほどく。

そのまま流れるように布団を敷くと倒れるようにして潜り込んだ。着替えるのも忘れてるし何ならお風呂も入っていないが、今はとにかく早く寝たい。

お風呂は明日朝イチに入ればいいし、制服も予備が何着かあるからこのまま寝てしまっても問題はない。

「……………雪風、あなたは……………」

後ろから何やら呟くような声が聴こえてきたが、既にうとうとしていたオレにははつきり聴きとることが出来ず、そのまま意識を落とした。

翌朝、何か物々しい様子の騒音によって目を覚ました。

何事かと思っていると、どうやら提督のあらゆる不正が発覚したことで憲兵によって検挙され、そのまま逮捕されてしまったらしい。

……………なんで？

提督、ブラック鎮守府の現状を知る（提督 side）

なんてこった、と、俺の着任先である鎮守府の門までやってきたところだ。そう思った。

大本営付きの車に乗って、俺はいよいよもってこれから長い間働くことになる職場へとやって来た。

聞いた話によると、ここは艦娘が前任者によって相当に酷い扱いを受けていた、いわゆるブラック鎮守府と呼ばれている訳ありな場所だという。

まさか大本営からはかなり離れているとはいえ、四大重要基地のひとつである舞鶴の第三基地を新人である俺がまとめろと言われた時は耳を疑ったが、それを聞いてからはよもや面倒な場所を請け負ったものだと思えた。

現在大本営では「艦娘は人ではないが、軍人であって兵器ではない」と主張する親艦娘派と「艦娘は兵器であって、人権などというものは必要ない」と主張する反艦娘派の二つの派閥で割れているが、恐らく両派閥からの意図によるものだろう。

親艦娘派からは俺に艦娘達への救済を、反艦娘派からは体のいい厄介払いとして。

いよいよもって鎮守府の前までやってきた車は、俺を下ろして少しだけ挨拶をした後、すぐに去っていった。

さて、と鎮守府の方へと向き直ってみるが、やはりというか、想像していた通り相当な大きな門戸であった。

かつて見た横須賀鎮守府に勝るとも劣らぬそれは、まさに重要な司令起点を担う基地なのだ。と改めて理解し門のすぐ近くに存在する守衛室へと近付くと、ひとつの人影が部屋の扉の前に立っていることに気が付いた。

影の正体は、俺も見知った姿の背の高い女性であった。

「貴方が新しい提督ですね？ 私は大淀型二等巡洋艦、大淀です。前任者の頃は主に書類作成のみを任されていましたが、艦隊指揮、運営も得意です。これから、よろしく願います」

「ああ、私は朝倉努（あさくらつとむ）という……臨時少佐だ。急な昇進により未熟なところも多いが、よろしく頼む」

「了解しました。では、お先に執務室へのご案内させていただきます」

大淀は挨拶をした後敬礼をとつたので、俺は答礼を返した。

それにしても一見おおよそ好意的に見える大淀だが、よく観察してみるとやはりというか、目の奥に映す警戒と怯えの色は俺にははつきりと分かってしまっていた。

俺には特殊能力、というか、特技とも言えるひとつの能力を持っている。

相手の目を見ることで、その目の主の抱く感情をはつきりと感じ取れるといったものだ。

一見するとただ感情の機微がはつきりと分かるだけにしか思えないだろうが、この力は、実は俺がまだほんの小さかった5歳の頃、何か突然に開花したのである。

それに、妖精さんからも俺の目は一般人のものとは何かが違うのにお墨付きを貰っているため、やはりこれは普通ではないらしい。

それはともかく、やはりここは俺が聞いていた通りのことがあったことくらいははつきりと理解することが出来た。

大淀なんて、俺の前についているというのに一切振り向きすらしていない。

更に言うなら、その背中からはどこことなく威圧しているような雰囲気すら感じる。

とはいえ、流石にこれからは秘書艦として働いてもらう相手にこのような緊張感のある関係のままに居るといっては流石に駄目だろう。

「なあ、大淀。ここにはどれくらい艦娘が居るんだ？」

「……ここには総勢96隻の艦娘が所属しています。内訳は戦艦12

隻、重巡1隻、軽巡1隻、駆逐3隻、正規空母8隻、軽空母6隻、潜水艦3隻、海防艦3隻、水上機母艦3隻、そして工作艦が1隻と給糧艦が2隻で以上になります」

「どうやら俺が思っている以上に所属している艦娘達の数が多いようだ。」

前任者の戦闘詳報にはそれはそれは相当の数の轟沈数が書き連ねられていたらしく、特に駆逐艦を盾とした捨て艦戦法の動きが見られていると聞かされているのだが。

それにしても気になることがあるな……。

「やたらと駆逐艦の数が多いような気がするが、前任者は捨て艦戦法を取っていたのではなかったのか？」

「そう言うと、先程から一切反応することのなかった大淀の足がぴたりと止まった。」

そして、大淀はゆっくり振り向きになり俺に剣呑な様の視線をこちらへ寄せた。

その目に映る感情は激怒、悲哀……そして、とんでもないほどの憎悪。

俺の今の発言は、まさに彼女の琴線にぴったり引っ掛けてしまったようだった。

「はい、前任者はそれはもうとんでもない作戦をもって私達の仲間を沈めてきました。駆逐艦は……そうですね、全部雪風のおかげですよ」

やはり前任者は捨て艦戦法をとっていたようだ。

これに関しては予想通りというか、むしろそうでなかったらどうやればあれほどの損失を引き起こすような無能だったのかと頭を悩ませていたところだ。

しかし、そんなことよりも予想外な名前が出てきたことに驚いた。

「雪風だった？ あ、あの、陽炎型のか」

「はい、その雪風です。恐らく……この鎮守府において彼女に戦場で助けられていない艦娘は居ないのではないのでしょうか」

「なんだと？」

雪風……先の大戦においても数十年という長い間を生き残り、また護衛艦としても数々の武勲を立ててきた名誉の駆逐艦。

その性能は艦娘となってもかなり高性能となっており、確かに前線に出しても見劣りしないほどの艦ではあるが……しかし、それでも駆逐艦だ。

戦艦や空母のように単騎で大きな戦略的効果を発揮する艦ではない、はずだ。

「提督はよくご存知でしょうが、駆逐艦とは本来単騎ではそこまで有用な艦ではありません。ですが……彼女だけは違いました。雪風は……あの子が主力艦隊の護衛艦に就くようになってから、轟沈数はかつての10分の1にまで減りました。駆逐艦に至っては、ここ2年で片手に収まるほどしか沈んでいません。その轟沈のほとんども、彼女が出撃していない艦隊がほとんどです」

「そんな馬鹿なことがあるわけが……！」

そんなことは有り得ない、と大淀を注視するが、彼女が嘘をついてるようには見えない。

「……すまない。あまりにも疑わしくてな」

「いえ、お気持ちは理解出来ます。ですが、そのせいで私達は彼女に私達とは比べ物にならないほどの重い責務を負わせてしまいました……」

大淀の声色は、まさに罪悪感と恐怖で溢れているような、そんな感じであった。

「それは、一体？」

「……この話は後で。丁度、執務室へと到着したところなので、先に着任の挨拶を済ませてしましましょう」

先を促そうとするが、大淀にはぐらかされてしまい、この話は一旦打ち止めとなった。

どうやら執務室には先客が居るようで、大淀は執務室の扉をノックすると、返事が返ってきたのを確認してから扉を開いた。

扉を開けた先は、無駄に豪華な装飾が滅多に散りばめられていて、見ているだけで不快な部屋があった。

その中央には執務用デスクと椅子があり、その前には4人の女性が並んでいた。

「長門さん、陸奥さん、赤城さん、加賀さん、ただ今戻りました。この方がこれより着任となりました新しい提督の方です。提督さん、彼女達は左から長門型戦艦2番艦の陸奥さん、そして次がそのネームシツプである長門さん、そしてかの一航戦所属艦、赤城さんと加賀さんです」

「貴方が新しい提督か……私が戦艦、長門だ。一応、総旗艦と第一主力打撃部隊旗艦としての立場を担っている」

「同じく長門型戦艦の2番艦、陸奥よ。立場としては戦艦総括、部隊所属は第一主力艦隊になるわ。よろしく頼むね？」

「航空母艦、赤城です。ここでは空母のまとめ役と、第一航空機動部隊旗艦もやっています。航空戦では誰にも負けませんよ？」

「……加賀です。赤城さんと同じ第一航空戦隊に所属しています……精々、私たちを上手に使いこなすことね」

「提督。まだ他にも数隻程居ますが、概ねの重役に就いているのが彼女達です」

「ああ、紹介ありがとう。私が新しく提督として着任することになった、朝倉努だ……これから、よろしく頼む」

挨拶の感触としてはまだなんとも言えないといった感じだろうか。

大淀の話ぶりからするに実情は相当酷かったように思えたが、彼女達に関しては提督である私にも感情的になることはなく、今のところは見極めてやろうといった雰囲気を感じる。

まだ思っていたよりもスムーズな立て直しが出来そうだ……そう思っていると、長門から声を掛けられた。

「提督よ。貴方には話しておかねばならないことがある」

「……なんだ？」

そう言う長門の顔は、先程までのまさに威風堂々とした感じが消え、まるで苦虫を噛み潰したような厳しい表情へと浮かべていた。

「提督も既に理解はしているだろうが、ここでは捨て艦戦法を取っていた。私たちは基本的に護られている側であり、当然思うところはあれど、直接的な被害が少なかった分、まだ理性の面では耐えられると言える……問題は、理不尽な命令により姉妹艦を失い、そして直接の被害も大きかった駆逐艦や軽巡洋艦だろう。特に、駆逐艦に至ってはほとんどの所属艦が姉妹艦を喪った経験がある。その恨みは、私たちでは推し量ることすら出来ない」

長門の言っていることは事前知識としても理解していたつもりだったが、やはり問題は駆逐艦ら小型艦であるようだ。

それにしても、確かに駆逐艦は資材的なコストパフォーマンスにおいてはもっとも使い捨てに最適とは言えるが、人ではないと言っても感情を持つ立派な軍人。

更に幼い身である彼女達を、なんの躊躇もなく使い捨てにしよ

うとするとは……まさに虫唾が走るとはこのことだろう。

「ここまででは、提督も覚悟のつもりで分かっていることだろう。しかし、問題はこれだけに収まらない。この鎮守府における最大の闇が残っているのだ。それが赤城の専属護衛艦であり、駆逐艦総括であり、そして臨時総旗艦である雪風の存在だ」

その旨は理解しているつもりだ、と返そうとしようとしたところで、長門に遮られる。

そしてまたもや彼女達の口から語られる、雪風の名。

「雪風のごことは、ほんの少しではあるが、大淀から聞いている。私には信じ難いが、相当な武勲艦だ」と

「ああ、彼女は凄い艦だ。あの強さは、見ていない人間には分かるまい……兎も角だ。雪風はそれほどまでに異様な程強く、そして今まで数え切れない程に艦娘を護ってきた。彼女に感謝していない艦娘は、この所属には居ないだろう。が、それほどの強さを誇る雪風を、前提督が目をつけないはずがなかった」

そう言う長門は一度話を止め、改めて深く息を吸った。

まるで、ここからが本番だというように。

「当然、提督とて馬鹿とは言えど利を完全に理解していないほどではない。捨て艦で僅かと言えど資材を棄てるよりも雪風を利用して消費を抑えられるなら抑えた方がいいとは分かっていたようだ。ましてや、雪風は駆逐艦……沈んでしまったならそれでいいと。それならそれで、もう一度捨て艦戦法を再開してしまえばいいだけといった考えに至ったらしい。鎮守府でも人一倍心優しく、そして臆病な彼女だ。駆逐艦の仕事をほとんど全て請け負うことに従った」

駆逐艦の中でも非常に成熟した体躯と精神を持つ陽炎型だが、

その中で雪風は一段と幼く、また仲間思いであることで有名だ。

まだ長門の言っていることを完全に把握はしていないが、なんとなく何故そうなったのか理解は出来た。

恐らく、雪風は人質を取られたのだろう……まさかの、自分の上司であるはずの提督から。

「それからの雪風の生活はまさに地獄だったのは、体験したわけでもない私でも分かる。それからというもの、雪風はあらゆる編成の護衛艦として引っぱりだことなった。特に、駆逐艦が出撃するような編成では必ず雪風が入る程だ。戦術論を理解している提督なら分かるだろう？ 駆逐艦が入らない編成などというものはほとんど存在しない……。私が知る限り、今までの2年間、一度も出撃していなかった日はなかったはずだ。それも、1日数回、だ」

「そんなに……!?!」

長門の言うことを信じるならば、雪風は建造されてから2年間、1日の休みもなく出撃し続けたということだ。

それだけの間出撃し続けて未だに轟沈していないというのものとんでもないが、それ以上に終わらない出撃により摩耗している精神が、未だに仲間を助けるという意志を持ち続けることの出来る強靱さに驚かされた。

終わらない永遠の苦痛と言ってもいいだろうに、どれだけ雪風が仲間思いであるのか、俺にすら分かってしまった。

「更に、雪風は1ヶ月に1度しか入渠の機会を与えられなかった。彼女の最大の強さは、まさにその生存能力と言っていだろう。あれほどまでに回避に特化した艦娘を、わたしは他に知らない。そして、雪風には水上戦ではつくはずもない生傷も多かった。どうやら彼女は、本来駆逐艦達が鬱憤ばらしとして受けていた虐待もその身に受けていたようだ。最初の頃は痛みで涙を流していた雪風も、気付けばまるで痛みなんて存在していないかのように振る舞うようになった。そ

れでも、彼女は私たちを心配させまいと気丈に笑っていた」
「ちつ、前提督め……！」

長門と聞かされているそれは、まさに地獄と言うにも生温い事実だった。

一ヶ月も入渠もなしに毎日……それも、一日に数度の出撃させられておいて轟沈しない艦娘など、私は史実を紐解いても聞いたことがない。

例え生き残ることが出来たとしても、流石に1ヶ月傷なしで済むなんてことはまず有り得ない……1ヶ月という長い間残った傷は、間違いない想像を絶する痛みであったことだろう。

それでいて、治したとしても出撃に終わりは無い。

治したところですぐ傷はつく……私は、前提督について舌打ちが漏れてしまう程にえも言われぬ程の怒りを感じていた。

「だが、我らは彼女に対して最大の過ちを犯してしまった……護られているはずの私たちは、こともあろうに、彼女に対してとんでもない疑念を抱いてしまった。そしてついに、雪風は壊れてしまったのだ」
「彼女には酷い仕打ちをしてしまいました……私は、私たち艦娘は、あの時のことを悔やんでも悔やみきれません……」
「それは一体どういう……！」

先程までは終始無言であった赤城までもが震える声でそんなことを言ったことに疑問を持った俺は赤城に尋ねようとしたが、それを遮るようにして執務室の扉が叩かれた。

俺は一度会話を止め、大淀に目を向けると、彼女は理解したように頷くと「どうぞ」と入室を促した。

大淀の声に反応するように「失礼します！」と何処か快活で有りながらも落ち着いたような幼い声が聴こえてくると、執務室の扉は開かれた。

入ってきた彼女の姿を視界に捉えた時、俺が真っ先に抱いた思

考は「赤い」というものだった。

入室した幼い容姿の少女の着ている本来白かつただろう制服は所々が血で赤く染まっており、それが乾いて相当経っていることも容易に理解出来た。

俺はそんな少女の目を見て……一瞬にして理解する。

これは、一筋縄どころではなさそうだと。

「雪風です！ 今日は空気に違和感がありますが、何かご命令はありますか？」

噂をすればとばかりに現れた件の少女は、人懐こそうな笑顔を浮かべながらも、その目は何処かおかしかった。

何かが終わって、何かが始まっていた朝

朝目覚めたら、何やら鎮守府内の空気が騒がしい様子。

まだマルヨンサンマルの総員起こし前の時間帯だというのに
一体何事か。

ちなみに俺は普段からこの時間帯から起きているので別に外
が騒がしいから叩き起されたってわけではなかったりする。

俺は駆逐艦だから朝食が貰えないんだよね……だから、こんな
朝早くからこつそり食堂で自分の分と同室の姉妹艦の分だけ作って
部屋に持っていくのがここに来てからの日課になった。

ああ、食堂担当の間宮さんと伊良湖さん、あと食糧管理をして
いる鳳翔さんから許可は貰ってるから別に盗んでるわけじゃないよ。

あのゲス提督のことだから間宮さん達みたいな戦闘が出来な
い給糧艦は速攻解体とか抜かしそうなものだけど、あのクズ提督は自
分で料理しないし……。

まだ寝ている姉妹艦達を起こさないようにそつと着替えを済
ませると、霞がかった視界で鏡の前に立つ。

特に意味はないが、なんとなくこうすることで日常を謳歌して
いるような気になるので、このルーティンは毎日欠かさずやってい
る。

「雪風……今日も頑張ります！」

もうすっかり慣れた敬礼をとりながら小さな声で意気込むと、
部屋を出て食堂へと向かう。

……しかし、なんとというか、やはり今日の鎮守府はいつもより
も空気が変だ。

というより、何処かピリピリしているような、そんな感じがす
る。

いやまあ、全部感覚でしかないんだけどね。

食堂に到着すると、珍しいことに、既に間宮さんと伊良湖さん……それに、多分鳳翔さんかな？ までもが3人揃って何やら忙しいなく調理に勤しんでいた。

提督の勝手な取り決めで食堂は9時からの1時間、12時からの1時間、そして夜5時からの1時間だけと決められていたはずだけど……？

調理場を覗き込むと、俺に気が付いたらしい間宮さんが微笑んだ。

「雪風ちゃん、おはようございます」

「間宮さん、おはようございます！ あの、何故この時間に？」

「あら……もしかして、雪風ちゃんは聞いてない？」

間宮さんにそう問われて、俺の頭上にはハテナがいくつも並んでいたことだろう。

間宮さん含めた御三方の様子からしてどうやら悪いことではなさそうだが……。

「まあ、それはおいおい分かることだから今は内緒ね？ それより、今日も皆の分の朝食を取りに来たのよね？ それならもう作つてあるから、持つて行つても良いですよ？ あ、けど出来れば駆逐艦寮の皆の分も持つてあげて行つて下さいね」

「え？ い、良いんですか？」

「ええ。雪風ちゃんも、今日はゆっくり休んでね？」

間宮さんが指さした方を見ると、確かに作りたての料理が運搬台車できつちり並べられて置かれている。

台車を押して行けば提督には勘づかれそうなものだが、幸運なことに艦娘寮は提督の私室からは真反対にあるため、艦娘の誰かが提督に告げ口をするか提督自身がこっちまで来ない限りはまずバレるこ

とはない。

ここの所属艦娘で提督を毛嫌いしていない人はまず居ないだろうから告げ口は問題ないし、あの提督も艦娘を下に見ていることもあって、少なくとも俺が見ている限りではこの時間帯に食堂に来ているのを一度も見たことはない……そもそも、普段の様子からしてまだ起きてすら居ないと思われる。

料理の数を見るにいつも俺が作っている量よりも大分多いように見えたが、どうやら駆逐艦全員分だったらしい。

改めて数えてみると、確かにぴったり人数分あるようだ。

それに、1人あたりの量も普段の倍はある。

にしても、やっぱり俺が作る料理よりは遥かに美味しそうだなあ……いいいやまあ、そりやあ間宮と言えば史実でもアイドルって言われてたくらいには人気の給糧艦だったし？

間宮のアイスや羊羹なんて専門店にも劣らないって言われてたらしいし、多少はね？

間宮さんは最後に何やら意味ありげに言った後、再び厨房の奥へと戻って行った。

そんなことを言われても、俺は今日も出撃の予定があるんだけどなあ……。

「あ……雪風ちゃん。おはよう」

台車を押しながら廊下を歩いていると、すれ違うように一人の艦娘と鉢合わせた。

俺自身とも非常に仲が良く、見知った艦娘のようだった。

「おはようございませす、吹雪ちゃん！」

彼女は俺と同じ駆逐艦の吹雪であり、この鎮守府では5指も入る程の実力を持つ歴戦の艦娘だ。

なんでも前提督……今のようにブラック鎮守府になる前からの所属らしく、駆逐艦の中では最も着任歴の長い古参の駆逐艦だったりする。

俺は3番目で、2番目は特Ⅲ型の響だ……何気に彼女も前提督からここに居るようで、今の提督になってから建造された駆逐艦という意味では俺が一番長いことになる。

純粋な水上戦は俺の方に分があるが、対空砲撃においてはこの鎮守府でも右に出る者はおらず、現在は加賀さんの専属護衛艦をやっている。

ちなみに、あまり他の艦娘と交流を持たない半ボツチ状態な俺の中でも、吹雪とは特に仲がいい。

理由としては駆逐艦の中でも年長者な分落ち着いてることもあつてか、訳あつて艦娘達から遠巻きに見られることの多い俺にも特に思うこともなく接してくれるからだ。

まあ、色々あつたからね……その点では響は吹雪より落ち着きがあるし、彼女も俺とは結構な親しみをもつて付き合ってくれているから、駆逐艦の見た目と精神年齢は思っていたよりも釣り合っていないのかもしれない。

俺？ 俺はそもそも前世持ちだし前は立派な成人男性だったからな……見た目だけで言うなら特Ⅲ型と変わらないけど。

相も変わらず元気な俺に苦笑する吹雪だが、俺の押している台車を見て何やら頷いた。

「雪風ちゃん、皆の分持ってきてくれたの？ ありがとう」

「はい！ ……あれ？ 吹雪ちゃん、なんで皆の分って分かつたんですか？」

「私が昨日のうちに間宮さん達に頼んでおいたんだ。流石にそろそろ皆も限界に見えたし……それに、新しい司令官からの命令でもあるから」

「あ、そうなんですな……え？」

なんとなく相槌を打ったが、今さりげなくとんでもないことを言わなかったか？

新しい司令官……いやいや、そんなまさか。

「新しいしれ……司令ですか？」

「別に言い直さなくても……前の提督は目に余ったみたいで、不審に思った別の鎮守府の提督が通報したみたい」

悲しげな表情で吹雪は言う。

Oh, Jesus……いや、確かにそうだったけども。

俺も最初の頃はもうあまりの暴力で流石に痛みに耐えかねて泣きそうになっただくらいだしな。

大の大人が他人に泣かされちゃたまんねえって感じで耐えてきたけどさ……それに、なんだかんだ心配してくれた艦娘もいっぱい居てご馳走様でしたよ本当ありがとうございました。

正直な話、最後までくらは俺もぶん殴ってやりたかったが……まあ、おかげで俺も成り行きがら強くなれたし、お互いウインウインな関係だったと思うことにしよう。

これからは収容所で幸せに生きてくれ。

「それに、もう新しい司令官が来てるみたいだよ？ さっき、大淀さんが案内してたところを見た子が居たみたいで……」

「え……」

って、もう新しい提督が来たのかよ！

こういうのって、普通は艦娘の感情を慮ってある程度期間を置くものでは？

いや、提督が居ないと鎮守府はまともに機能しないことを考えたからおかしくはない、のか？

艦娘は基本的に乗組員と軍艦を両立した存在だからあくまで自

分で思考して戦闘することは出来るんだけど、艦長や司令塔の役割を持つのはあくまで司令官で、更には司令官としての基本能力に「所属艦と艦の間に思念的なケーブルを接続して、意識的なコミュニケーションを取る事が出来る」というものがある。

これがないということは、つまり通信機も全くない状態で艦隊行動を行っているに等しくなってしまうために、連携が一気におざなりになってしまう。

別に、椅子に座ってこれこれこうしろというだけでなれるほど、提督という椅子は甘いものじゃない。

提督の素質には最低でも妖精さんと呼ばれる艦娘とは切っても切れない存在を視認出来る必要があるのだが、この素質を持つ人材が今は本当に不足しているとは聞いたことがある。

提督……いや、もう前の提督か、あいつがこんなところで身に余るとしか思えない席に座っていたのには、間違いなくこの人材不足が大きい要因であったように思う。

けど、だからこそここまで早く新しい提督が派遣されたのが不思議でならない。

もしか、新しい提督にもまた何かきな臭い何かがあるのではないだろうか。

「あの。吹雪ちゃん。代わりにですが、この朝食を持って行ってもらっても良いですか？」

「え？　なんで？」

吹雪は不思議そうな顔になるが、答えはひとつしかない。

俺が新しい提督を見定める、これだけだ。

「はい、新しい司令にご挨拶をと思いましたが」

「……別に、雪風ちゃんが行くことでもないと思うよ？」

吹雪がそう言うが、全くもって俺もそう思う。

長門さんみたいな役職についているわけでもないのにわざわざ挨拶に行くのはおかしい。

というのも、俺にとつては今後どう動くかの布石のためには出来れば早く顔を合わせておきたいというのが本音だ。

流石にこれを出す訳にはいらないが。

更に言うと、理由はもうひとつある。

「それに、雪風よりも吹雪ちゃんの方が皆も顔を合わせやすいでしょう？」

「それは……」

吹雪はと言えば分からなさそうに言い淀むが、要は気まずいということだ。

話せば長くなるが、他の駆逐艦の皆とは本当に色々あって、正直俺もまともに顔を合わせて話すことが出来る自信がない。

ただでさえコミュ障万年ボツチな俺が、ぎくしゃくした関係の相手にまともに喋れると思うか？ つまり、そういうことだ。

「なので、吹雪ちゃんにお任せします！」

「え!?! ちょっと……」

俺は吹雪に台車を押し付けると、何か言い返される前にさっさとその場を引き返した。

吹雪が何か叫んでいるのが聴こえるが、聞かないふりである。

さて、新しい提督の元へ向かうのはいいが、肝心な居場所を聞き忘れていた。

とはいえ、あの口ぶりからして吹雪自身が提督を知っているわけでもなさそうだったから聞くまでもないか。

それに、大淀さんが案内してたって言ってたのを考えると十中八九、執務室だろうしね。

執務室への道中はまさに閑散としており、ぶつちやけるなら艦娘とは誰一人として鉢合わせることにはなかった。

食堂までならまだしも、執務室までの廊下は提督と顔を合わせる可能性が高くなるからそりやそうだけどね。

執務室の扉の前までやってくると、中から何やらぶつぶつと話し声が聴こえてきた……どうやら長門さんと、知らない男の人の声みただい。

ビンゴだね。

一息深呼吸を入れると、ノックを入れた。

少しして中から入室を促す声が聴こえてきたので、俺は慌てることもなく入室する。

執務室の中は、予想に反して新しい提督とおぼしき男性と大淀さん、長門さんの他にも、陸奥さん、赤城さん、加賀さんまでもが居た。

まさかの指揮系統勢揃いに、俺もびつくりである。

よく見えていないためあまり分からないが、新提督（仮）も俺を見てぎよつとしているように見える。

……あ、そういえば血濡れの制服を着っぱなしじゃないか。

と言っても、替えの制服も総じて血まみれだから着替えても結局は同じなんだけどね。

日がな一日出撃三昧休み無しというブラック企業もびつくりの超ブラックな生活だったから、血抜きするだけの余裕がなかったんだよね。

外にも出ないから私服も一着として持ってないし。

上官の前でこの姿は流石に失礼極まりないが、今更どうしようもないことだからいつそ開き直すことにしよう。

そもそも、俺悪いことをしたわけでもないんだし。

一通り周りを見ると、俺はまずジャブから行うことにした。

「雪風です！ 今日には空気に違和感がありますが、何かご命令はありますか？」

恐らく提督は雪風のことは知っているだろうが、俺とは初対面だから一応最初に名乗りを上げることがは欠かさない。

それでいて途中からはまるで何も知らないかのような反応をする。

この言葉の真意には提督を除く全員が気が付いたことだろう。提督に関しては俺のことを知らないのだから、無理もないことだ。

俺の名乗りにも、大淀さんは咳払いをひとつ入れると、提督の紹介を始めた。

「雪風さん……貴女ならもう分かっているとは思いますが、こちらが新しく提督としてここに着任されました、朝倉努少佐です。提督、こちらが雪風です」

「君があ……私が朝倉努だ。聞けば、雪風はここの武勲艦らしいかな？ そんな君が仲間であることを誇らしく思う。よろしく頼む」

どうやら新提督は既に俺のことを聞いていたらしい。

そりゃあ、鎮守府内でも話題に事欠かない上にかなり特殊だから話が出てもおかしくないか。

俺は努めて笑顔を浮かべると、挨拶を返す。

「はい、しれえ……司令！ なんでもやります！ 宜しくお願ひします！」

もうこの身体になって2年経つが、相変わらずこの身体は上手く口が回らない。

中身は立派な大人だから羞恥心が大きいのだが、やはりいつになってもこれは直りそうにないな……。

しかし、この提督はかなり若く見えるし、なんとなくイケメンの雰囲気を感じるな……ここで一つ布石を打っておこう。

「雪風はなんでもやります」

続いて俺がそう言うと、周りの視線が一気に集まったのが分かる。

「だから」

きつと、周りは俺の内心なんて一切理解していないことだろう。

「皆には手を出さないでください」

提督は俺だけを見ていればいい。

無駄にイケメン面されたら皆が絆されるかもしれないじゃないか。

そうしたら、俺の楽しみはどうなる？ 存在意義はどうなる？

「全部、雪風にお任せください！」

俺の目が届く限り、目の前でラブコメディチャラブなど絶対に許さ
んからな！

かつて幸運艦であったもの（提督side）

「はい、しれえ……司令！ なんでもやります！ 宜しくお願ひします！」

——この雪風は生きていようで死んでいる。

顔を合わせてまず最初に彼女へと抱いた認識がそれだった。

「雪風はなんでもやります」

雪風は歴戦の艦だ。

かつて大戦時においても非常に長い期間で活躍した艦だった。

そして大戦が終わり丹陽と名を変え祖国を離れることになっても、あらゆる面で活躍した経歴を持っている。

その側面が反映されてか、本来の雪風の艦娘は非常に人懐っこく寂しがり屋で、反面水上戦ではまさに「水雷屋」と謳われたかつての日本の奮迅ぶりを見せつける天性の戦闘資質はとんでもない所がある。

しかし、この雪風はどうだろうか。

戦闘に関してはまさに非の打ち所もないと言っていいたいだろう。

むしろ、練度や戦果だけで見るなら恐らく全ての雪風の中でもトップに挙がるだろうというのが俺の認識だ。

が、この雪風はよくみる艦娘の雪風が持っている小動物が如き甘えた気質と言える部分を全くもって見受けられない。

目は何処を見ているかも分からない程昏く、一見して快活そうな笑顔もやはり空虚を思わせる。

まるで全てを……自分さえも騙しているかのように精巧に作られている、そんな感覚であった。

「だから」

ただ、それでも俺はこの駆逐艦、雪風を不気味だとは思わなかった。

いや。むしろ俺は雪風に対して強い悲しみを抱いてしまっていた。

「皆には手を出さないでください」

この雪風は自分を理解することを諦めている。

この雪風は他者に理解されることを諦めている。

……雪風は、自分の目を、手を、足を、頭を使って生きることが諦めてしまっているのだ。

「全部、雪風にお任せください！」

そう言う雪風の目は……まさしく不安で揺れていた。

俺の考えでは、恐らく彼女の目はほとんど物を映してはいないだろう。

それでも、多少は感情を読み取ることが出来た。

少々の悲しみと、罪悪感を。

「雪風……」

赤城の悲しげな声が届いた時、俺は気付けば雪風の前にしゃがみこんでいた。

「よくやった」

気が付けば、俺は雪風の頭に手を乗せてそんなことを言っていた。

「は……う？」

いきなりのことで理解出来なかったのか、雪風はぽかんと呆然の表情でそんな声を漏らしていた。

なんだ、そんな顔も出来たんだと俺はつい笑みを浮かべそうになったがなんとか堪え、頭を撫でる。

聞いていた通りかなりの間入渠出来ていなかったようで、髪はぼさぼさでお世辞にも臭わないとは言わない……まあ、艦娘は汗などはかかないのであくまで海の潮の香りがするだけだが。

「君は今まで自分を押し殺してまで仲間を、姉妹を護ってきたのだから」

この雪風は間違いなく壊れかけている。

まさしく崩壊寸前と言っても良いだろう。

だが、まだ今なら間に合う。

何しろ彼女は堕ちていないのだから。

「私から提督としての最初の命令を出す」

そう言うと、雪風は再び真剣味を帯びながらも仄暗い表情を浮かべると共に背筋を伸ばした。

周囲の空気は一気に緊張に包まれる……が、流石の俺とてこのタイミングで上官としての命令などを出すつもりはない。

「君の好きな物を教えて欲しい」

瞬間、空気が一気に弛緩したのが分かった。

雪風なんて目を丸くしているし、大淀達も明らかに何かに安堵したような表情を浮かべているように見える……俺が何か嫌な命令を強要するとも思っただろうか。

「好きな物、ですか？」

「そうだ。欲しい物ととってもらっても構わない。何か無いか？」

そう言うのと、雪風は苦悶の表情を浮かべた。

微かにその目から読み取れる感情は困惑……恐らく、何故このようなことを言われているのか理解出来ないのだろう。

何かを護るのが当然であり、また自らは何かを喪うだけの生活を続けてきたのだから、仕方のないことと言える。

「……やっぱり、雪風は要らない、です」

少しの逡巡の後、雪風はそう言った。

やっぱりそうだったか、と俺は少し残念な気持ちになる。

「けど」

ただ、それでは終わらなかった。

雪風は続けてそう呟き少し躊躇いがちに視線を移しながら。

「休みが、欲しいです。雪風だけじゃなくて、皆で……けど、雪風だけが貰うなら、やっぱり要らないです」

続く言葉に、今度は俺が驚かされる番だった。

いや、俺だけではない。

見れば大淀が、長門が、陸奥が、赤城が、加賀が。

全員がまるで見たことのないものを見たかのように驚いている。

雪風と違ってはつきり読み取れる彼女達の感情からは共通して歓喜をはつきりと読み取ることが出来た。

対して雪風からは、ほんの少しの恐怖の感情が窺えた。

上官に対する陳情ともとれるこの状況に、一笑に付されてなかったことにされるか、または自分及び他の艦娘達に怒りの矛先が向かな

いかと勘繰っているのだろう。

俺は柔らかな笑顔を意識しながら、雪風を安心させるように言葉を返す。

「安心して欲しい。言われるまでもなく、しばらくの間は艦娘達全員に出撃させるつもりはない。もちろん雪風も含めて、な。少なくとも、1週間の間はここ周辺の海域は他の鎮守府が持ち回りで海域維持につとめてくれることを約束してもらった。その間、ゆつくりと身体を休めて貰いたい。当然だが、再び海に出るようになってもらってからもしっかりと休みは取れるようにローテーションは組む。前提督のように駆逐艦の捨て艦なんかをやるつもりはないし、そもそも私は誰一人として沈めさせない覚悟でここに臨んだつもりだ。今はまだ信じられないだろうが、今後の私の動きで信用に値するか、しっかりと判断して欲しい」

「……はい。分かりました」

少し納得していないような感じで頷く雪風。

あまり好感触は得られなかったが、まあ今はこんなものだろう。

……早く、雪風の笑顔を取り戻せば良いのだが。

「そういうえば、雪風は何か用があるのだったか？ 私に関係することなら、今のうちに聞くが」

「あ、な、なんでもありません！ しれえ……司令、失礼します！」

ふと気になって問いかけると、何故か雪風は少し顔を俯かせながら慌ててそう言うと、私の返事を待つことなく部屋を出ていった。

にしても雪風、さっきから誤魔化してばかりだが噛み噛みだぞ……あれでバレていないと思っているのか？

にしても、あまりにも突然雪風が居なくなってしまったことで話題が途切れてしまったな……いや、そういうえばまだ聞くことがあった

な。

「ところで長門に聞きたいことがあるのだが。雪風のあの目……もしや、見えていないのではないか？」

「！あれだけで気が付いたのか。そう、だな。厳密には完全には失明していないようだ。本人から直接聞いたことはないが、恐らく……いや、十中八九そうだろう」

予想していた通り、というべきか。

雪風の目ははつきり開かれてはいても焦点がふらふらとあまり定まっていなかったというのもあるが、何より俺の感情感知能力がかなり効きにくかったから、恐らくそうなのだろうとは思っていた。

俺のこの特殊能力はあくまで視力を持つている相手でないとか効かないので、かなり読みとりにくかったのも頷ける。

効かない、のではなく効きにくい、だったので断定は出来なかったが。

「長門が知っているということは、他の3人も？」

「そうですね。恐らく、鎮守府で知らない艦娘はほとんど居ないと思います。ね、加賀さん？」

「ええ、そうね。雪風も隠しているつもりなのかもしれないけれど、普段の身動きですぐに分かったわ。むしろ、傍から見てもほとんど見えていないことが分かるのに水上ではとんでもない動きを見せるのだから不思議ね」

「そうか」

確かに、目が見えなくて射撃などはどうやっているのだろうか？

雪風にはまだ何かありそうだ……。

「……提督には、話しておきたいことがあるの」

「陸奥、まさか」

先程まで黙り込んでいた陸奥が喋り出したことに、長門が目を見開いて驚愕の表情を浮かべている。

それも目を見る限り、本当に今日一番の驚きに見える。

「しかし、提督はまだ今日やってきたばかり……」

「長門、これは話しておくべきだと思うの。私達の……いえ、私の罪は自分から言いたいのよ。それに、提督だってもうこの仲間よ。確かに前の提督は酷かった。けど、全ての提督がそうじゃないことくらい、私達は分かっているはずでしょう?」

「……済まない」

「いいのよ……赤城、加賀」

陸奥が赤城と加賀の方に視線を向けると、彼女達はひとつ頷いて俺の方へと視線を向けた。

「ええ、分かりました……すみません、提督。陸奥が席を外して欲しいようなので、退室しても宜しいでしょうか」

「あ、ああ。別に問題はないが」

「私達も知っている話だけど、今はまだ私達がこの話に参加するべきではないの。分かって頂戴、提督……では」

そう言つて、最後に2人とも恭しくお辞儀をすると、静かに退室した。

「ねえ、提督」

「なんだ?」

今までのやり取りからしてどうやらかなり重要な話であることは読み取れた。

だからこそあえて今までは静観していたが、どうやらすっかり話

してくれるようだ。

「今から話すことはこの闇よ。それも、一片に過ぎない」
「うむ。聞かせてもらおう」

タイミングからして雪風関係の話だろうな。

こちらをしつかり見つめる陸奥の目に浮かぶのは、悔やんでも悔やみきれないとばかりの後悔。

「結論から言うわね。雪風の視力の弱化……あれの原因が、私なの」
「なに？」

さしもの俺も、まさか陸奥が元凶であるとは思わなかったため、
つい声をあげてしまう。

どうやら、早々に想像していた以上に厄介な案件らしい……。

「正確に言えば、私の三式弾の至近弾による炸裂焼夷攻撃ね。これが、
雪風の視力をほとんど奪ってしまった要因よ。これが原因で、雪風は
あの時に全身を覆うほどの大火傷と、目を奪ってしまった」

三式弾……対空専用弾か。

元々対戦闘機を要とした砲弾である三式弾の炸裂攻撃であれば
確かに目など簡単に焼いてしまうだろう。

むしろ、艦娘であったからこそ大火傷で済んだと言ってもいい。
人間であれば、間違いなく身体のプロトタイプを留めることもあるまい。

「しかし、何故そのような状況に？ 三式弾などで、普通なら狙ってもい
ない限りは命中するものではないと思うが」

「狙ったのよ」

「……は？」

陸奥は今、なんと言った？

「別に雪風に狙った訳ではないわ。けど、雪風に当たることは承知で狙ったのは確かかね。あれは今から半年は前のこと……あの時は対地上型深海棲艦艦戦だった。同編隊に組み込まれていた雪風が小鬼群を引き付けてくれていた間に、敵旗艦である飛行場姫を私達で倒したわ。その後のことよ。私は……小鬼群を撃沈するために、その至近距離に居る雪風に当たることを分かっていた、躊躇なく三式弾を放ったわ」

「何故だ……何故そんなことを！」

俺はつい声を荒らげて陸奥に問いかけるが、彼女は何も言わない。

ただ、相も変わらずその目は後悔と諦念で溢れていた。

なんだ、一体どういうことだ。

雪風に、俺の知らない何かがあるというのか？ 雪風に何があった？

「雪風には、とある噂があったの。その内容は根拠も証拠もない、完全にでたらめの根も葉もない噂よ」

俺は黙って陸奥の言葉を聴く。

「提督は、雪風の戦いぶりを見たことはある？ もちろん、ここではなく、一般的な雪風のことよ」

「ああ。素早い動きで敵の砲撃を避けつつ、夜戦になればもの見事に魚雷を命中させてくれる。流石は幸運艦と呼ばれるだけはある」

「そうね……この雪風も意味合い的には概ね間違っては居ないわ。あの子も敵の攻撃は避けるし、命中もさせてくれるわ……あまりにも上手い具合にね」

「……その何処が変なんだ？」

陸奥は俺の顔を見て、一度言葉を止めた。

「言葉だけで見るなら、確かにおかしくはないわね。でもそれなら、私のはあの子が砲撃を外しているところを見たことがないし、直撃弾を浴びて帰ってきたことなんて今までに片手に収まるくらいしかなかったわ」

「待て、そんなことがあるはずは……」

「提督、確かに与太話のような話だが、本当だ。雪風は火力がそれほどではないし、主砲の取り回しもうちの吹雪ほど上手くはないからあまり対空砲などは持たずに主砲が一門だけ。それでも弾道の精密さのレベルで言うなら、私も外しているところを見たことがない」

「……信じられない。が、本当なんだろうな」

俺が信じられないとばかりに返すも、長門にまで言いくるめられる始末。

そんな話、かの最大戦力たる横須賀第一や最前線である柱島でも聞いたことはない。

絶対必中の艦娘など、いくら低火力の駆逐艦と言えど間違いなくそこかしこから争奪戦になるレベルだ。

「それに、もっとおかしいのは回避よ。いえ、あれは回避と言っていいのかしらね……雪風に迫る敵の砲弾が風もないのに勝手に逸れていくのには、もう見慣れてしまったわね」

「逸れる、だと?」

「ああ……敵の砲は間違いなく雪風の方へとしっかりと向いている。雪風は動くことすらしない。だというのに、ほとんど動くこともなく弾の方が勝手に明後日の方へと飛んで行くんだ。まるで、弾の方が雪風を避けるかのようだ」

「それ以外にも、何故か敵が雪風に砲を向けただけでジャムを起こしたなんてこともあったわね」

長門や陸奥から語られる雪風の戦闘風景の数々は、もはやそれは戦闘なのかと勘繰ってしまうようなものばかりだった。

なるほどこれだけ不可解なことがあれば、雪風の戦いぶりが異常だと言うのも頷ける。

「その戦いぶりを知っているのは私や長門だけではないわ。駆逐艦や軽巡洋艦でも同じ艦隊に入ったもの……重巡以上であれば全員見ていると言つても間違いはないわね。だからこそ雪風に対して疑いを持つ艦娘が現れてしまった」

「疑い？」

確かに違和感はあるが……いや待て、まさか。

「提督はなんとなく分かったみたいね。そう……鎮守府にはふたつの噂が流れたの。ひとつは、雪風は深海棲艦のスパイだということ」

有り得ない、話ではない。

艦娘にだって人に恨みは持つし、極小数ではあるが人から離反する艦娘だって存在する。

けど、居ない訳ではないというだけであつて、やはりその確率はほとんどないと言つてもいい。

そもそも、深海棲艦にとつても艦娘が潜在的な敵だからだ。

となると、可能性としてはこちらの方が高い。

というより、艦娘であるなら誰だつて有りうることなのだ。

「ふたつは、雪風は深海棲艦だということ」

雪風の生きる理由

——全く、危なかった。

ある意味胸がドキドキしていると言えるだろうか。

それにしても、まさか提督があんなだとは思っても居なかったぜ……。

整った顔立ちの裏では、まさかあんな側面を持っているとはな。

「新しい提督はロリコンですか……はあ」

おっと、つい雪風らしからぬ溜息が出てきてしまった……口調はそのままだけどね。

口調の方は2年間、ずっと演技し続けたこともあってかつての俺の話し方が口から出ることは無意識に出ることも今では全く無くなった。

むしろ、男口調で話すにも意識して喋らないといけなくなってしまうたまであるくらいだ。

こんな声からいきなりがさつな言葉が出てきたら違和感しかないもんね仕方ないね。

閑話休題。

あの提督は俺の予想だが、恐らく生粋のロリコンと思われる。

だってさ、いくらなんでも初対面で頭を撫でながら「欲しいものはないか？」って聞くのって常識的に考えておかしくない？

しかも命令なんて言われたもんだから俺もどうすればいいか迷っちゃったじゃないか。

なんとか俺のナイス考えによって無難な返事が出来たが、あれは間違いなく英断だった。

人を魅了するような笑顔の裏には、きつと幼女雪風をあんな手こんな手であれやこれやして手管に毒そうとしていたに違いない。

おのれ大本営、典型的なクソ提督が消えたかと思つたら今度は小児性愛者がやってくるとは。

とりあえず、提督は要注意人物、と……。

「あれ？ 雪風ちゃんなのです？」

「電ちゃん？ あ、おはようございます」

休みと言われて予定が全てなくなってしまったことで今日は何をしようかと途方に暮れながら歩いていたら、通りがかった電に話しかけられた。

暁型駆逐艦の末っ子である電はこの鎮守府でもかなり大人しく、しかし以前に俺に関する騒動では最後までずっと俺を庇ってくれたくらいには優しい子でもある。

暁型は全員駆逐艦の中でもダントツに幼い見た目なところもあつて非常に愛くるしく、この鎮守府内での数少ない癒し枠に収まっている。

時間にしてまだ起床ラップも鳴っていない頃だが、電が部屋の外を歩いているのは酷く珍しく思える。

もう全員が起きている時間ではあるだろうが、そもそも電は優しい子だけあつて、艦娘には珍しいくらいに臆病な子でもある。

いざ戦いにもなればやはり艦娘なのだとは分かりはするのだが、前々から深海棲艦との戦いにすら躊躇している節があつた。

こんな子に、内心人の曇り顔を見て笑つてるような奴が助けられているのだから、本当に申し訳ないものである。

どうか許してくれ……やめないけど。

「はい、おはようなのです……雪風ちゃん、何でこんなところに？ それより、朝ごはんは食べたのです？」

「あつ」

電に言われてやっと思ひ出した。

「そういえば俺、吹雪に朝食の配膳を頼んでそのまま執務室に行っちゃったから、食ベ損なってるんだったな。」

一回、部屋に戻ろうか……。

「なんてことを考えていると、ようやく自分の身体が空腹を理解したのか、お腹が鳴った。」

「やばい、恥ずかしすぎる……なんか電もクスクス笑ってるし。」

「相変わらず、雪風ちゃんはドジっ子です」

「雪風がドジっ子、ですか？」

「待て電よ、それは流石に聞き捨てならないぞ。」

「大体、お前だってドジっ子の部類だろうが。」

「ちなみに最有力格は五月雨、異論は認める。」

「でも雪風ちゃん、前に何もなくて躓いたり、お水と間違えてお酒を飲んだり、A型と間違えて元型を持って出撃してたです」

「うっ……」

「反論しなかったが、確かにそんなことがあったな……い、いや、俺だってこう見えて中身は大人だぞ？」

「流石に何もなくて転ぶ訳がない。」

「絶対、あの時は足元に段差があったに違いない。」

「それに、お酒に関しては目がほとんど見えなくなっただけのことだったからお酒だと気が付かなかっただけなんだ。」

「主砲だって、あの時は間違いなく俺があそこに置いてたはずなんだから、きつと妖精さんか他の艦娘が別の場所に移動させていたんだ。」

「ほら、やはり俺は何も悪くない。」

「「そういえば、雪風ちゃんは司令官さんが変わったことは知っている」

のです?」

「はい。知っていますよ。雪風は、さつき司令に挨拶に行っていたので」

挨拶という名の押し売りだけだな。

というか、電も知っていたのか……多分誰かから聞いたのかな?

俺が知る限りでは吹雪くらいしか……いや、吹雪も新しい提督を見たつていう艦娘が居るつて言つてたつて。

それに今思えば、間宮さん達も明らかにいつもとは様子が違つていた。

あんな時間から大量に料理なんて作つていたら食料の貯蔵量を確認された時にまずバレていただろうし、報告書からも話が行つていたことだろう。

前提督はなんだかんだ言つて、艦娘を信用していなかっただけあつて食事以外のことは身の回りのことや書類仕事も含めて全て自分で行つていた。

前提督は馬鹿ではあつたが、決して無能ではなかつたということだろう。

そうでもなければ、何年もの間周囲を騙してブラックな運営体制を続けることなど出来なかつただろうし。

この世界では俺が思つていた以上にブラック鎮守府なんてほとんどないらしいからな。

艦娘のことは「女の形をした兵器。ただし、得体が知れないもの」としか認識していなかつたようだが。

「あつ、提督さんから言伝があります。しばらくは出撃は全員お休みらしいです。哨戒の代わりは他の鎮守府に頼んでいました」

「それは……良かったのです。新しい司令官さんは、無理をさせない人、ほつとしたのです。もつと、皆の元氣の姿を見たいですから……」

そう言う電の顔は取り繕っているようには見え、心の底から安堵しているように見えた。

何故、電はそんなにすんなり受けいられたんだろうか。

「電ちゃんは、何故そんなにすぐにその言葉を信用出来るんですか？
もしかしたら、嘘だつてことも……」

「……電は、電の中の軍人さんを信じているのです。昔、軍艦だった頃の軍人さん達は、皆厳しく口が悪い人も多かったです、それでも嘘は言わなかったです。それに」

不思議になって問いを送ってみると、電から、思ってもみなかったことを聞かされた。

艦娘には、かつての大戦で軍艦だった頃の記憶を、個人差はあるが持っている。

聞いている感じでは電はかなり過去の記憶を持っているようだ。
対して、俺はそもそも魂自体が異物であるからか、それほど記憶と言える記憶は持っていない。

強いて言うなら、寂しさ……それが、この雪風の仲の記憶に強く
燻っている、そんな感じだ。

電は言葉を一度止めると、俺の顔をじっと見て。

「雪風ちゃんが言ったからです」

「ほえ？」

そんなことをいきなり言うもんだから、つい俺も変な声を出して
しまった。

俺が言ったからって……いやいや、どういうことだつてばよ。

「司令官さんのことはまだ分からないけれど、雪風ちゃんのことには信じているのです。雪風ちゃんがそれを私に教えてくれたから、わたしも雪風ちゃんのことを信じているのです」

あ、あれえ？

電さんこんなキャラでしたっけ？

なんかめっちゃイケメン発言……というか、俺への信頼半端じゃないな!?

俺、なにかやったかななんて思いつつ、真正面から電の顔を見れなくなっていた。

もしや俺、かなりちよろいのではないのだろうか。

「雪風ちゃんも、司令官さんは嘘をついてないって信じてるんじゃないですか？ そうじゃないなら、そっくりそのまま私に伝えることはないと思うのです」

言われてみれば、そりやそうだ。

あの場にこの鎮守府では特に力の強い艦娘達が揃っていたから、というのもあるが、俺自身は電に不信感をおくびにも見せなかった。

振り返ってみれば、むしろ結構発言的には割と肯定している方のような……?」

「……やっぱり、雪風には分からないです」

結局、俺はそう返すしかなかった。

いやだって、確かに否定とかしなかったけどそれは中身が大人な俺だからだしな。

というか口には出していないだけで内心では「イケメン爆発しろ」とかそんなこと言いまくってたしな。

「今はまだ、良いと思うのです。電は、もう雪風ちゃんの傷が増えるのが、痛みを耐える姿を見るのは嫌だから」

「痛み……」

電に顔を顰めながらそんなことを言われる……そういえば今月はまだ入渠してなかったか。

一瞬何故そんな顔をしたかと思ったが、そういや今の俺の姿って全身傷だらけの上に乾いた血だらけとかいう一見やばい状態であることに思い至った。

いつの間にか傷が当たり前になっていたせいで、そんなことにすら気が回らなかった。

……痛みを感じなくなったのは、いつからだっただろうか。

今の身体の異常は右目の失明に左目の急激な視力低下、そして痛覚の消失、これに付随した味覚の麻痺といったところか。

戦いに関して言うなら、これらの感覚が消えたことでむしろその他身体的な能力が諸々向上しているから問題はない。

むしろ、練度の向上もあつて前よりも強くはなっているかな？

多分俺の異世界に來たことによる特典によるものが大きいんだろうけど。

にしても「身体的能力を一つ失うことで、その他全ての能力を向上させる」なんて特典、あまりにもデメリットが強すぎる上に上昇量も不透明だからこんなのを欲しがるやつなんて誰が居るのだろうか。

俺にはぴったりだけどき……。

「あの、雪風ちゃん……この後、何か用事がありますか？ 良かったら、もっと話がしたいのです。暁ちゃんも、喜ぶと思います」

恐る恐る言う電。

お喋りというが、さりげなく暁が加わってきてる時点でもう部屋に連れ込む気満載か。

電の部屋はそのまま第六駆全員の相部屋だから、あとは他にも響と雷も居るわけだ。

響は良いが、雷か。

幼女に甲斐甲斐しくお世話されている中身成人男性の見た目幼女……犯罪臭が凄いな。

そもそも幼女4人の部屋に俺が行くこと自体が事案では？
なんて言ってみるが、そもそも俺の同室も不知火と時津風、結局
幼女ですね分かります。

……これ以上は傷が広がるからやめよう。

「ごめんなさい。雪風は、他の艦娘とは……」

「けど雪風ちゃん、このままじゃ独りになってしまうのです。そんな
ことは、陽炎ちゃんだって望んで……あつ」

ああ、電。

それは流石に悪手すぎるぞ。

よりによって俺の前で陽炎の名前を出すなんて。

「その名前を出さないでください」

「ご、ごめんなさい！ そんなつもりじゃなかったのです！」

俺の中の数少ない黒歴史……陽炎。

あの時のことは、恐らく死ぬまで忘れることはないだろう。

「陽炎お姉ちゃんの名前を、出さないでください！」

そう叫んだ後、気付けば俺は走り出していた。

後ろから電の声が聴こえてくるが、止まるつもりはない。

陽炎は……正直、もう思い出したくはなかった。

忘れられるはずなかったのに。

そんなこと、有り得る訳がなかったというのに。

食堂の前まで走っていたことを理解すると、俺は足を止める。

それほど走った訳ではないから、常に鍛えている俺がこれくらい
で息を切らすことはない。

「ねえ、雪風」

ただ、他の艦娘が近くに居ることには気が付かなかった。

「響、ちゃん……」

「雪風、君は本当にこのままで良いのかい？　いつかきつと、後悔することになるよ？」

この口ぶり、いきなり言うことではない。
と、なれば。

「聴いていたんですか」

「そうだね。それはもう、柱の影でばつちり聴かせてもらったさ……でもね、雪風。私は君を心配しているんだよ。電も、他の皆だって同じさ。それに、懸念もある。私と吹雪は、それを心配しているんだ。このままじゃ……戻れなくなるよ」

目を細めて言う響だが、耳をすませば声がほんの少しだが震えているのが分かる。

本当に心配してくれているのだろう。

だけど、それは俺の願いではない。

全員が仲良く過ごせる鎮守府なら俺はここに居る必要がないし、俺は他の人を、艦娘を信用することが出来ない。

結局のところ、俺が今を生きているのは利害の一致でしかないのである。

それが生き甲斐であり、俺の命を繋いでいるただひとつの生命線と言える。

「人の不幸を見ながら、その不幸の末にハッピーエンドに至る」という俺のわがままな願いに答えてくれているのが、今の立場なんだ。

だから同情はやめてくれ。

俺は望んでこの立場に居る。
それが出来ないのなら死んでいるのと変わらないし……深海棲艦にだってなった方がマシだ。

だからごめんよ、響。

俺は、俺の欲望に従って生きる。

「響ちゃんには、関係ありませんから」

「……そうかい。分かったよ」

悲しみを堪えたまま、響は踵を返し立ち去って行った。

きっと、彼女や吹雪はわたしののような艦娘を見たことがあるのだろう。

おかしなことではない。

響も吹雪も、既にこの世界で俺の倍以上は艦娘として戦ってきている。

俺は雪風の持つ本来のセンスと特典能力のおかげでようやく足を並べて戦えているが、やはり経験の差で地力は劣るといえるのが俺だ。

百戦錬磨とも言える彼女達とは、見てきた景色が違いすぎる。

廊下から窓の外を見下ろすと、潮風の香りが流れ込んでくる。

特典のおかげで、嗅覚が上昇しているためだ。

ああ、それにしても。

——海が赤い、な。

雪風は交流を愉しみたい
雪風は何色にも染まれない

「諸君。話はもうそちらにも伝わっていることだろうが、改めて紹介させてもらう。私は前提督に代わり、新しくこの鎮守府に着任することとなった、朝倉努だ。君達にも色々思うところがあるだろうが、ヒトナナサンマル、この時間に顔合わせがてら食事会を行いたいため、食堂へと集まって欲しい。食材については私が持ち込んだ分を使うため、心配はいらない。これは命令ではなく、私の要望に過ぎない。だから来なくてもいい……が、出来れば全員集まることが望ましいと思っている。願わくば、君たち全員の顔を見たく思っている。以上だ」

内部放送にて矢継ぎ早に提督はそう述べ、放送は終わった。

ことは、数時間前まで遡る。

さて、色々ごたごたしつつも俺はようやく部屋に戻ってきたわけだが、現在、部屋の中に入れないでいる。

その理由としては、あれだ……：…なんというか、ものすごく気まずいわけだ。

ルームメイトの時津風や不知火は、以前のブラック鎮守府という状況の中で姉妹艦である雪風俺におんぶにだっこの状態であることが分かっていただけに、今までは心配はしつつも、俺がやっていることを止めさせることが出来なかった。

なんとも歯がゆい思いをしていたことだろう。

まあ他のほとんどの艦娘達は俺に意識を割く余裕もなかったのか、俺を止めようとすることも、また過酷な現状に前提督に直訴に向かおうとすることすらしていなかったが。

これを聞くと誰しもがなんと薄情な、と言いたくもなるだろう

が、実際これには訳がある。

あくまで俺の考えた仮説でしかないのだが、恐らくこれは艦娘が生まれついで軍人であることが最大の要因だと思われる。

本来人間とは元々未成熟な精神を成長の過程で養っていくものだが、艦娘の場合は作られた頃から既に精神はある程度自律しており、それでいて最初から既に軍人観念というものを持っている。

……まあ、簡単に言うなら「自分で考えて行動出来ないお子ちゃまだし、本能的な問題で上司には逆らえないぜ」ってことだ。

俺のような前世を持っている存在なんて、それこそ深海棲艦よりも例外だ。

ある意味、完全に敵対している深海棲艦よりも得体の知れないのが俺と言っても過言ではない。

なにせ、幼女の皮を被った精神が成熟している立派な成人男性だからな。

深海棲艦ではないと言えどかなりグロテスクであることには変わりないので、以前に深海棲艦扱いされていたのもあながち間違いではないとは思っているので、それほど気にはしていなかった。

代わりに、俺のガラスのハートはもはや罅だらけであるが。

そう考えると、今までやたらと俺に対して「こいつ本当に駆逐艦か？」みたいな感じで疑心暗鬼になりながらも攻撃されてきた事実さえ、子供のおいたのように微笑ましく感じる。

もちろん嘘なので、フレンドリーファイアをカマしてくれた奴らは悉く心の中でボコボコにしているが。

とはいえ、実際疑われてもおかしくはないとは思っている。

雪風が強いのは分かるが、いくら死に物狂いで回避技術を磨いたとはいえ、流石に数回の出撃において被弾ゼロなんておかしいことくらいは俺でも分かる。

確かに回避の運要素がかなり強いゲームとは違って今はリアルな訳だし、自分で避ける必要が出来たことで反射神経でなんとかなっているから、なんてのは流石に苦しいよな……。

なんて、脱線した思考でむんむんしていると、不意に部屋のドアが開かれ、時津風が現れた。

ドアの先で立っている俺に気が付いた時津風は、一瞬だけ目を丸くすると、途端に不機嫌そうな表情を浮かべた。

「あつ、時津風」

「……ふーん！ 時津風、雪風なんて知らないもーん」

そんなことを言いながらふいと顔を背けて、立ち去って行った。

今の可愛い……じゃなくてだな、流石にルームメイトと蟠りを残したままというのは俺的には大変宜しくない。

というのも、時津風と不知火は他の艦娘達とは決定的に違っている部分がある。

それは、時津風と不知火は日が経つにつれて増えていく傷を見て、前提督に直接抗議に行こうとしたという前歴があるということろだ。

俺が休みなく出張ることで、俺が出撃している際に他で出撃していた艦隊でも重巡以上の重量艦に最低限駆逐艦に気を配れるように意識を持たせた。

俺がほとんどの駆逐艦の負担を請け負ったことで、以前の轟沈しか道はなかった駆逐艦達に生きるだけの気持ちの余裕を持たせた。

あの現状でいくらか余裕が出来た駆逐艦ではあるが、姉妹とはいえ、他人に気を配れるだけの余裕はあったというわけだ。

軽量艦も重量艦もそうだが、基本的に姉妹艦の繋がりというのは非常に強い。

俺も前世は可愛くて優秀な姉妹が居たから、その気持ちは大いに分かる。

人間ではないだけに血の繋がりというものは存在しないが、それ

に限りなく近い一種のコミュニティが、姉妹艦というものだ。

それこそ、それが原因で鎮守府内部に不和が出来かねないほどに。

もちろん、例外も存在したにはしたのだが。

話が逸れたが、とにかくは時津風と不知火、この二人だけは常に俺の目が届くところに居て貰わないと困るのだ。

以前、俺の状況に憂いて提督に直接物申した艦娘が居た。

昔の鎮守府内でもムードメーカーの中心であり、またあらゆる艦と繋ぎを作っていたかつての古兵、金剛型戦艦のネームシップ、金剛だ。

彼女は俺の傷だらけの全身を見て憤り、たった一人、執務室へと乗り込んだ。

翌日、金剛は出撃に向かい、行方不明になったことを知った。

今更だが、俺は人の苦痛に満ちた顔を見るのが好きだが、俺の手がかからない範囲で不幸になれるのが、堪らなく嫌いだ。

不幸の結果として居なくなることなんて、俺としてはあつてはならないことだ。

不幸は過程だけでいい。

俺の目指すところは、あらゆる不幸を乗り越えつつのハッピーエンドというものだ。

ただし、そのハッピーも俺以外の全員が、だが。

俺まで幸せになるようなことがあれば……それは愉悦の終了に他ならないからな。

まあ、それに関しては既に身体的機能を一部失っている俺にはそう難しいことではないから問題ない。

どう時津風達とよりを戻そうか、などと考えていると、俺は何気なしに視線をドアに向けて、そして少しだけ開かれたドアから覗いている不知火の目に気が付いた。

「ぴっ!？」

「……はあ、全く。雪風、あなたはいつまでそこに居るんですか？ ほんら、入ってきてください」

俺が声にもならない悲鳴をあげると、やれやれとばかりに溜め息をついた不知火がドアを開け、俺の手を掴んで部屋の中へと誘い込んだ。

なんかいかわしいシチュだな、なんてしようもないことを考えたのは秘密だ。

「雪風、あなた、まだ昨日のことを気にしていますね？」

「し、不知火お姉ちゃん……?」

顔をずいと至近距離まで近付けてそんなことを言う不知火は、なんとというか、凄く怖い。

というか、近い近い。

俺はたまらず目を逸らすと、その途端、全身が何かに包まれる感触に襲われる。

えっ、とついそんな驚きの声を漏らしてから、ようやく不知火に抱きしめられていることを理解した。

「雪風が何かを隠していることくらいは、不知火も気が付いています。それも、きつと気付かれると不都合があるということも、なんとなく分かっています」

おう、ばれてーら。

「雪風が一人で居る時、こっそりと変な笑顔を浮かべていることも知っています」

ちよつと待てや、何故それを知っている!?

変な笑顔ってあれだよね? 悦に浸っている時の笑顔のことだよ
ね!?

「雪風、あなたが何を抱えているかは知りません……ですけど、もう一人で咎を背負うことはやめにしましょう?」

「……ダメです。雪風が、雪風が悪いんです。雪風が駄目な子だから、だから雪風がやらないと……」

「それは違いますよ」

なんとか言い訳を立てて言い逃れようとすると、不知火は有無を言わさぬように割り込ませてきた。

「陽炎のことなら、雪風だけの罪ではありません。あれは……陽炎型全員の責任です。皆だって、そう思っています」

そうは言うが、その言葉には流石に納得は出来なかった。

この鎮守府に陽炎が居ないのは、俺が原因であることは間違いない。
い。

だからそんなことで気負う必要はない、そう言おうと思ったのだが。
が。

「それに、不知火は……雪風までも居なくなるようなことがあったら、
もう……」

その言葉を聞いて、すぐさま俺は言おうとしていたことを止めた。
た。

「不知火お姉ちゃん」

……そんなことを言われてしまったら。

「ごめんなさい」

思わず、拒絶したくなつちやうじやないか。

「ゆ、雪風？」

俺の言ったことに、信じられないとばかりに目を見開く不知火。俺は内心で笑みを浮かべながらも、申し訳なさげに顔を俯かせる。

俺はもしかしたら、さつきまで何かを勘違いしていたのかもしれない。

本当に今更ではあるが、ここはもう以前のブラック鎮守府ではなくなつた。

今の提督はロリコンなのが目につくが、恐らくあの様子だと直接艦娘をどうこうするようなことはないだろうし、艦娘への扱いも相当良い物になるだろう。

それなら、わざわざ俺自身が不知火と時津風の様子を見る必要性はあるのだろうか？

答えは、否だ。

「雪風は、死神です。雪風に関わったら、不知火お姉ちゃんまで不幸になつちやいます。もう、嫌なんです。だから、雪風は護られる側じゃなくて、護るガワで居たい……大丈夫です、だって雪風は……沈みませんから！」

「待って、雪風。不知火だって……！」

「お姉ちゃん」

何かに悔いるように縋り付いてくる不知火の顔を見ながら、俺は決定的な一言を呟く。

「今までお世話になりました」

そう言うと、俺が言っていることが理解出来たのか、不知火は顔を真っ青にして目に涙を浮かべ始めた。

俺が不知火の手をそつと身体から引き剥がすと、彼女は腰が砕けたかのようにその場にへたり込んだ。

そんなさまを申し訳なげな顔を維持しつつ心のなかでは喜びながら一頻り眺めると、俺はそれから何も言わずに部屋を退出した。

明らかに、不知火は俺に依存している。

その気は、時津風にも前々から見られていた。

俺としても、依存されるということは悪いということではない。

依存されればされるほど絶望は大きくなるし、その分の曇り顔の絶望っぷりと言えば、まさに高級ワインのような至高感がある。

だが、不知火のあれは愛を超えて、もはや執着と言ってもおかしくはない。

これから先、かつてのブラックからホワイトに変わっていくだろう環境下では、それは困るのだ。

俺のためだけに動くようでは、今後あまり付き合い方も増えていくだろう艦娘達との交流の際、間違いなく支障を来す時が来ることだろう。

彼女の曇り顔は好きだが、流石に俺のようなぼっちの烙印まで不知火にレッテル貼りされてしまうのは、あまりにも申し訳がなさすぎる。

それに、自分で考えて自分で動いてくれるようになるからこそ……俺も愉悦のために動きやすくなるというものだ。

何も考えずに部屋を出てきてしまったが、俺はもうあの部屋に戻ることはないだろう。

時津風なんて、まさに突然の喧嘩別れみたいな状況になってしまった訳だから恐らく泣いてしまっただろうが、俺の愉悦のためなので仕方がないことだ。

こんなすぐにもまた提督のところへ行くのは癪だが、このままでは一晩を過ごすだけの部屋もないので、改めて提督に部屋の変更を頼まなければならない。

正直本来であればまさしく烏漕がましいともとれる申し出ではあるが、俺の以前を既に事前知識を得ているだろう提督であれば、渋々ではあるだろうが、無碍にされることはないはずだ。

「…………ふ、ふふふ」

俺はこれから先の生活を思うと、つい雪風らしからぬ笑みを浮かべてしまった。

他人に見られて変な想像をされてしまっってはかなわない、と慌てて表情を取り繕い、周りに人が居ないのを確認する。

今まではブラック鎮守府という状況下にあった分、俺の好きな苦悶とも言える表情を見る分には十分に満たされていたと言ってもいい。

ただ、これからはこの鎮守府も変わっていく……いや、変わらざるをえなくなっていくだろう。

ただし、それは逆に言うなら、今までがあまりにも不自由すぎた分、これからは俺の思いのままに振る舞うことが出来るということにもなる。

言い換えるなら、これからは俺の思う通りのシチュエーションを作り上げることが出来るということだ。

今までの状況が量だというなら、これからは質を重視して愉悦といえる状況を作り上げることが出来る。

また、元ブラック鎮守府という下地が存在することも、まさに大きなアドバンテージと言えるだろう。

その鍵こそが、新しくやってきた提督という存在となつてくれる。

何故なら彼はまだ、この鎮守府がブラック鎮守府と言われていた所以を正しく理解出来ていないからだ。

いや、それに関して言うならば、提督だけではない。

ここに所属しているほとんどの艦娘ですらも、その意図を理解出来てはいない。

だって、前提督の本当の所業を知っている艦娘は、俺しか居ないのだから。

提督さん、雪風はこちらです（提督 side）

ヒトナナサンマル
17時30分。

予定している宴会の時間がいよいよもってやってきた。

以前まで芯まで真っ黒なブラック鎮守府であったここ所属している艦娘のほとんどは、前提督の行った非人道的な行いによって人間に對して強い恨みを抱いている。

長門達のようなまとめ役などの前提督より更に前の提督の頃から所属している古株の艦娘達は警戒はしつつもまだ反応としては悪くはないのだが、やはり前提督の頃に新造された艦は軽重問わず俺とは全くもって関わろうとすらしてこなかった。

まるで空気のような扱いだ、不思議なことに、それでも殺意は感じられなかった。

それを疑問に思っただけで長門に聞いてみると、どうやらこれもブラック鎮守府の頃に起きた出来事が関係しているらしい。

内容は教えてもらうことは出来なかったが、これもまた雪風に関係していることのようにだ。

雪風、彼女はこの鎮守府の中でも非常に特殊な存在だとはつきり思う。

日本中を探しても雪風という艦娘は現在ではここを含めても3箇所には存在しておらず、そしてそのいずれもが非常に重要な拠点であり、かつ雪風は駆逐艦の主力級として前線で活躍しているという。

そういえば、かつては全鎮守府を統括している大本丸である本営の直下拠点、現在の最高司令である草鹿元帥が直接指示を行っている横須賀第一鎮守府にも雪風が居たと聞いている。

現在はもうおらず、また異動になったわけでもないようだ……つまり、そういうことなのだろう。

それはともかく、わたしは以前、偶然にも別の鎮守府に所属している雪風と顔を合わせたことがある。

あの子はまさに表情が豊かでとても人懐っこく、それでいて常に前向きな愛らしい子だった。

しかし、この雪風はまるきり違っていた。

初対面の彼女の表情は常に何かに思い悩んでいるようで、もうまともにも視力も残っていない目からはほんの微かではあるが何か大きなものに怯えているように見えた。

表情も一見して笑顔ではあるがそれが表面上のものであることは一瞬で分かったし、また、俺に対して必要以上に近付けないよう一定以上の距離をとっていた。

聞けば、この話題には常に雪風が欠かせない程に非常に大きな存在となっているのがよくわかる。

まるで雪風のことを深海棲艦だとか艦娘の敵だなんて思っていた艦娘が居たこともあったらしい。

どうやら今ではそんな考えの艦娘はおらず、むしろあの時なんぞそんな考えになったのか当人でも不思議なくらいにおかしかったようだが、ひとまず艦娘と雪風の間認識的な軋轢があること以外は特に問題はなさそうなことには俺も安堵したものだ。

「時間、か」

時計の針がきっかり30分を示しているのを確認すると、俺は一度大きく息を吸い、そして先程から扉越しにざわめきが聴こえてきている食堂へと躍り出た。

ブラック鎮守府な割にはかなりの大所帯だけあって、一度見回しただけでは全ての艦娘を確認することは出来ない。

俺が立台に立つと、艦娘達は揃って微動だにすることもなくなった。

その様子はまさに軍人の如し……いや、これは恐れているのだ。

一人一人、順に目を覗いて見れば分かる。

次の提督はわたし達に何をさせようとするのか。

どんな扱いをされるのか。

強い恐怖に疑念……不信感を持つ視線。

俺が見た限りからではあるが、誰一人としてそれを持っていない艦娘は居ない。

まあ、長門達主軸のメンバーですら未だに完全にはそれらを払拭出来て居ないのだから、きつと昨日まで進行形で酷い目にあつてきた艦娘達に今から信じてくれと言われたとしても、しつかり受け取つてくれるわけもないので無理はない。

それを、どうにかするのが上官である俺の役目だ。

「あ、あー。諸君。私の要請により集まっていただけ、感謝する。とはいえ、私のことを知らない者も多いことだろう。だから自己紹介から始めさせてもらう。名前は朝倉努。階級は少佐であるが、これはここに異動されるにあたって臨時的に昇進という措置を取った結果であつて、元の階級は大尉だつた。これでも、軍学校は首席で卒業している。とはいえ、現場を知つてまだ5年程度の若輩者であるため、私から君達に色々と教えを乞う時もあるだろう。その時は、宜しく頼む。それと……すまなかつた」

そう言つて直角になるほどに深く頭を下げると、ちらほらと驚愕を含まようなくもつた声が聴こえてくる。

疑心はまだ全くもつて解けてはいないだろうが、ほんの少しでも警戒心を緩めさせるだけの糸口を作れるのではあれば、頭を下げることに躊躇いはない。

艦娘達の驚きも冷めやらない内に、言葉を続ける。

「俺達……直接指揮していたのは前提督だが、同輩である提督という役柄に就く人間がこの鎮守府に居る艦娘達、つまり君達にやったことは我らが御旗に誓つても禁忌と呼べる行為であり、また憤慨すべき許されざる行為だつた。このようなこと、同類である私が言つてもきつと君達は信じることをしないだろう。だからこそ、私はこれから言葉

ではなく行為をもつて、君達を最優先に指揮を行うことを宣言する。もし君達が私に近寄ることもしたくないというのなら顔を合わせるようなこともしないし、何か欲しい、して欲しいものがあるというのなら出来る限りは対応しよう。勿論、私を殴ってもらってもいい。だからこそ、これからは、私の為すべきことを見ていて欲しい……どうか、頼むぞ」

そう締めくくることが、誰も声を放つこともなく、しんと静まり返る。いたたまれなくなつてなんとかこの場を無理矢理解散するように動こうとしたところで、最前列からひとたび、咳払いが静寂の中をはつきり通り抜けた。

大淀は列から抜けて出ると俺の前に立ち、数度手を叩く。

「簡潔ではありませんでしたが提督のお話はこれで終わりです。今回の召集におけるメインはあくまで宴会ですので、あとは各自、あちらのテーブルから好きなタイミングで食事の方をとってください。バイキング形式なので、取り皿もあちらにあります。食料の備蓄でしたら、大本営からの物資補給を受けたためいくらでも食べてもらっても構いません。如何なる処分を行うこともないと約束します。食事を終えたあとも特に指示を行うことはないので、自由行動で問題ありません。では、各自解散」

まるで堰を切ったかのようにすらすらと言い連ねた大淀は最後にしつかり纏めると、かなり遠慮がちではあるもののちらほらと各自動き出すのが見えたので、なんとかあったと俺はほっと一息安堵の息を吐く。

対して大淀の方は見事に取り仕切った後、俺の方を向いた途端呆れたかのような視線を向けてきた。

……いや、彼女の目を通して見る感情から見ても強い呆れが窺えるあたり、心底そう思っているのだろう。

「全く。本来なら貴方の仕事ですよ。あんなところで逡巡するから言うべきことが分からなくなるんです」

「す、すまない。私はああいった、衆目の前に立って演説を行うのがあまり得意ではないんだ。本当に、大淀には助けられたよ」

「はあ。では、私はこの辺りで失礼します。提督も、ごゆっくり食事でもなさってください」

「分かつ……いや、待ってください」

危うく頷きかけたが、肝心なことを聞き忘れていたことを思い出し、再度大淀を呼び止めた。

「なんででしょうか。まだ私に何か用でも？」

……なんか、ちよつと口調が刺々しくはないか？

しかし、彼女の感情からは純粹な疑問しか感じ取れなかった。

大淀とはこんな子だっただろうか。

いや、これがここの大淀の個性なのか。

「雪風が何処に行ったか分かるか？ どうやら、召集には応じなかったみたいだが」

「雪風さん、ですか？ 確かにここには居ないみたいですが……あ、吹雪さーん！ ちよつと来てくださいー！」

少し納得した様子の大淀は少し考え込んだ後、少し周りを見渡して、一人の艦娘を呼んだ。

呼ばれた本人も気付いたようで、一度手を振ると急ぎ足で俺達の前まで来ると、彼女……駆逐艦吹雪は俺に向かって敬礼をとる。

意外にも、彼女はどうかやら俺に対してそれほどの悪感情は感じられない。

というよりも警戒こそ多少はあるが、恐怖に関しては欠片も抱いていないようだ。

よく見てみれば、この吹雪は他の艦娘とは違い制服が一般的な吹雪型とは少し違っている。

この吹雪、第二改装まで受けているのか。

「初めまして、司令官！ 吹雪型駆逐艦、吹雪です！ どうぞ、宜しくお願ひします！」

「あ、ああ。改めて宜しく頼む。早速本題といきたいんだが、吹雪は雪風の場所は知ってはいないだろうか。ここには居ないみたいなんだ。頼む、知っているなら教えてくれないか」

「雪風ちゃんを？」

一気に膨れ上がる警戒心。

これだけでも、吹雪にとつては雪風が一体どれほど親しい仲なのか分かる。

吹雪は訝しげに大淀に視線を移す。

「吹雪さん。提督さんなら大丈夫です。私も彼の経歴を異性関係も含めて洗いざらい確認させていただきましたが、特に問題はありませんでした。それに、彼なら雪風の現状も……」

「いえ、いいです、大淀さん。信用はまだ出来ませんが、仕方がないので、教えてあげます。雪風ちゃんなら、今は埠頭に居ると思いますよ。私も直接見たわけじゃないですけど、あの子は昔からそうだったので」

不服そうに言う吹雪だが、その目には心配の色が灯っているから、まだ俺のことを信じていないだけで悪い子ではないのだろう。

むしろ、雪風にもしつかりと信頼出来る相手が居ることを知って安心したというものだ。

「恩に着る。引き止めてしまつて済まなかった。じゃあ、私はこれで……」

「待つてください、司令官。最後にひとつだけ聞かせてください。何故あなたは、そんなにも雪風ちゃんを気にするんですか？ 雪風ちゃん、前提督の分も含めて今までにたくさん辛い目にあつてきました。貴方が知っていることも知らないことです。今の提督である貴方が雪風ちゃんに近付くだけで雪風ちゃんを傷つけてしまうかもしれないとは思わないんですか？」

そのまま埠頭に向かおうとしたところで、今度は吹雪の方から呼び止められる。

俺の知る吹雪よりも一段と落ち着いた雰囲気を保ったまま、彼女は最後にそう言い放つと、俺は静かに瞑目した。

確かに、俺が雪風にしつこく絡みに行くのは彼女を傷つける、というか元あつた心の傷を悪化させる可能性だつてあるだろう。

ふと、俺は昔、と言つても6年程前の出来事。

軍学校を卒業したての俺は研修生としてとある鎮守府に所属することとなり、そしてたつた1年程の短い期間の邂逅ではあつたが、その鎮守府に居た雪風のことを思い出した。

あの雪風を初めて見た時、おれは彼女が酷く儂いもののように見えた。

まるでこの世そのものを悲しんでいるかのような彼女は、初めて俺と喋った時は、口調こそ朗らかではあつたが、内心では拒絶してるのが俺にははつきり分かつた。

それから長い時間をかけて雪風は悲しげな表情も減るに反して笑顔も増えてくると同時に少しづつ仲が良くなっていき、しばらくすると雪風は俺をある程度は信頼してくれるようにまでなつた。

その時間は俺にとって非常に実りがあるものだっただけにたつた1年だけの所属となつてしまったのが今では名残惜しい。

そんな彼女だが、今はもう居ない。

あの雪風は数年前、とある大規模作戦によって轟沈してしまつた。

俺は閉じていた目を開くと、かがみ込んで逸らすこともなくじつと相変わらず真剣な表情を浮かべる吹雪と視線を合わせる。

「俺が研修生だった頃、一人の雪風にあつたことがある。彼女は幼い容姿だというのに纏う雰囲気だけは老成していて、まるで世を僂んでいるように見えたんだ。たった1年の付き合いだったが、彼女の姿ははつきりと覚えている。今でも、彼女に何か出来ればと悔やむことも多いくらいだ。俺は、この雪風と同じものを感じ取った。それなら、やるべきことはひとつしかないだろう」

そう言うと、吹雪は瞠目した。
何にかは分からないが、少なからず驚いているようだ。

「あなたは……いえ。そうですか、分かりました。それでしたら、私も協力させてください。私だって、雪風ちゃんを助けたいんです。でも、私1人では、雪風ちゃんを助けられない。司令官、雪風ちゃんを助けてあげてください。私達が護れなかった雪風ちゃんを、今度は貴方が助けてください」

護れなかった、という部分に少し引つ掛かりがあつたが、答えることに躊躇いはない。

「ああ、もちろんだ。俺の胸の階級章にかけて誓おう」

そう返すと、ようやく吹雪は微笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。あ、でも雪風ちゃんに気があつても貴方の方ではないですから、決して手を出さないでくださいね?」

真面目な雰囲気急を崩した吹雪は、おどけたようにそんなことを

言う。

失礼な、こいつは俺を一体なんだと思っっているんだ。

「私はロリコンではないぞ。そんなことはしない」

「どうでしょうか……ほら、雪風ちゃんのところに行つてあげてあげてください。私も、流星にそろそろ皆がせつついてきているので」

吹雪の後ろにちらと目を向けると、確かに誰かが吹雪を呼んでいるようだ。

あれは……吹雪型に睦月型か。

吹雪は思いのほか人気者のようだ。

「そうだな。では、行つてくる」

「はい。雪風ちゃんのこと、お願いします」

最後にそう言つて会釈すると、吹雪はそのまま艦娘たちの輪に戻つて行つた。

さて……。

「ところで、大淀は何故まだ残っているんだ？」

何故かは知らないが、吹雪と話している間も大淀はずっと残っていた。

「駄目でしょうか？ 折角なので、護衛の理由も含めて私も埠頭に同伴しようと思つていたのですが」

さも当然かのように言うが、俺だって護衛術には長けているれっきとした軍人なのだが……。

「だが、さつき何処かへ行こうとしていなかったか？」

「そうですね。でも、別に用事があったわけではありませんよ？ それに、雪風さんのことも心配ですし」

……それは暗に、俺が雪風に何かしないかとか、そういう意味ではないよな？

「まあ、いい。それなら着いてきてくれ」

「はい、分かりました……？」

と、そんなやり取りの中で突然、何やら慌てた様子の妖精さんが現れ、大淀に向けて何かを言っている。

内容が気になるところだが、生憎普通の人は妖精さんの姿を見るこ
とが出来ると素質を持つ人間すら極一部のみでその一部すらも声を聴
きとることは出来ず、例外として艦娘だけは全員が妖精さんの言葉が
分かるという。

とはいえ例外も居るようで、艦娘との間に産まれた子は元々妖精さ
んを見ることが出来る素質を持つ者も多いらしく、また、本当に極稀
に、言葉を理解出来る者も居るのだとか。

まあ俺はそんな人間に会ったことはないし、真偽は定かではない
が。

妖精さんに耳を傾けている大淀さんは話を聞いていくに連れて、顔
を青くした。

「て、提督！ 大変です！ どうやら、この鎮守府に北東方面から深海
棲艦の一個艦隊が接近しているところを索敵レーダーにて確認。ま
もなく到着とのことですよ！」

「なんだと!？」

俺はその報告を聞いて、何故気付かなかったのかと歯を食いしば
る。

しかしよく考えると、今日は一度も索敵を出していなかったことを思い出した。

そうなる、今日は索敵がなかったことに気付いた深海棲艦が先遣隊を出したのか……？

だが、それでもたった1日でそれほど速い動きを見せるだろうか……いや、もしかしたら、何処からか話が漏れた可能性もあるかもしれないということか。

深海棲艦とて、ただ俺達を襲うだけの馬鹿ではないことはここ数年の戦闘で我々軍人にははつきり周知されていることだ。

今ここが建て直し中であることを知れば、向こうが絶好とばかりに夜襲をかけてくるのも何らおかしいことではない。

「敵編成は？」

「はっ！ 重巡が1、軽巡が2、駆逐艦が2……そして、潜水艦が1とのことです」

夜襲だからそうだろうとは思っていたが、やはり機動重視の水雷戦隊で来たか……しかも、よりによって潜水艦までもがやって来ていると来た。

となると、うちの主力陣を軒並み出撃させるのは問題か。

100歩譲って戦艦だが、機動力としては軽量艦に遥かに劣り、また潜水艦を相手にした対抗策は全く持ち合わせていないことを考えると、やはり出すわけにはいかない。

それならやはりうちも重巡を主軸においた駆逐艦の高機動艦隊で行くしかないか……。

ただ問題は、俺が知っている駆逐艦と言えば雪風と吹雪だけ……。

「……大淀。雪風は、何処に居るのだったか」

「提督、いきなり何を……雪風でしたら、先程吹雪さんも埠頭にと……あっ」

大淀がハツとしたのと同時に、俺はとある決断を下した。

「大淀はこれより艦隊の編成を頼む。危急の問題であるため、出来れば練度が高い者からだ。私はこれより……埠頭へと向かう」

「そんな！ 危険です！ もうすぐ傍にまで迫っているんですよ!？」

艦娘ならまだしも、私達の提督になるはずの貴方にそんな深海棲艦が居るかもしれない場所へなんて向かわせる訳にはいきません!」

「分かっている。だけど……すまない。俺がこうしたいんだ」

大淀は焦ったようにそう言うが、俺はそんな大淀を振り払うように走り出した。

「ああもう、知りませんからね！ 戻ってきたら、長門さん達にも報告しますから!」

そんな声が後ろから聴こえてきたが、俺は聴かなかったことにした。

酷く長く感じる廊下を駆け抜け、俺は鎮守府の外に出る。

そして目的の場所に近付くにつれて……俺の嫌な予感はやはりの中していたのだと理解した。

普段なら波の音以外は静かであったであろうそこは、見事に炸裂音と硝煙の煙る戦場と化しており、埠頭の所々に着弾した後が残っていた。

更に暗くてよく見えないが、海で少し離れた地点に探照灯が灯っているのが分かり、その持ち主はやはり俺が目下探していた相手、雪風だった。

雪風は探照灯などという荷物を抱えたまま、深海棲艦艦隊相手に単身で相対するという無茶を超えて無謀な行動に出ていたのだった。

どうやら雪風は敵を鎮守府から引き離そうとしているようだが、やはり一人では耐えることすらどうにもならないらしく、じりじりと敵

艦隊は鎮守府の方へと迫ってきていた。

「雪風！」

気付けば、俺は叫んでしまっていた。

まさに、俺が犯してしまった最大の悪手であった。

「し、司令官!? ……危ない！」

雪風が俺に気付いたが、当然気付いたのは雪風だけではなかった。深海棲艦も俺に気付いたようで、少し離れているせいで見えにくかったが、雪風の照らす探照灯によって俺にもそれが見えてしまった。

砲塔を俺の方に向けながら顔を歪める、重巡り級の姿が。

しまった、そう思いつつも超高速で飛来する砲弾など避けられるはずもなく。

きつと呆然としていたであろう表情の俺の内心は、万事休すといったもの。

しかし、俺に衝撃がやってくることはなかった。

本来なら間違いなく俺に命中していたはずの弾道。

その間に割り込んでくる影によって、俺の命は繋ぎ止められた。

代償として、その影……雪風は、何故だか最後に俺の方を見て寂しげな微笑みを浮かべると。

その身以上に巨大な砲弾をまともに受けた小さな体躯は、凄まじい勢いで吹き飛ばされていった。

……俺は、一体何をしているのだろうか。

敵襲と、単騎の雪風

夕焼けに染まる空がほとんど暗くなってしまったのを見上げながら、誰も居ない埠頭を歩く。

17時半から歓迎パーティという名の提督による親交を深める作戦が施行されるみたいだけど、まあ、すぐに行く必要もないだろう。

艦娘全員が本当に集まるとは思えないけど、気まずい関係の子が多いからね。

それに、愉悦のためならむしろ今は出来るだけ会わない方が後々面白そうだ。

そんな本来重要なはずの行事をほっぽかして、俺は今、基地の半分以上の面積を占めている埠頭を歩いている。

うちの基地の埠頭は、以前別の場所からやってきたとある艦娘に聞いたことがあるんだけど、何処の基地と比べても馬鹿みたいに広いらしい。

おまけに言うと、もはや埠頭と言うには海面と比べてもかなり高い位置に作られており、もはや港と言っても過言ではない。

そのせいで、ここから出航するとなると抜錨の前に飛び降りる必要があるし、戻ってくる時も変に高いから苦労する……まあ、もとより艦娘の身体能力ならひとつ跳びで戻ってくることも出来るし、そもそもここ、前提督の時は立ち入り禁止になってたから関係ないんだけど。

でも、深海棲艦のせいで軍艦も出せないこの時世に、なんでここまで堀の高い埠頭なんて作ったんだろうね？

俺は先端までやってくると……躊躇うことなく、足場のない宙へと一歩踏み出した。

そしていよいよ海面に叩きつけられようとした時に……俺は、海面へと着地した。

まあ、艦娘は普段は人と同じではあるものの、海に浮くことが出来るからね。

艦娘だって艀装をはずせば普通の人のように泳ごうと思えば泳げるし、力だつてそこそこ落ちる。

それでも成人男性くらいの力はあるけどね。

とは言つても、俺はこの姿になつてから泳いだこともないし、なんなら艀装を外したことすらないけども。

ちなみに、そのことはほかの艦娘達どころか、実は前提督ですら知らなかつたりする。

バレてしまえば、前提督によつて完全に軍規違反で留置所どころか、完全に処分されていただろうし。

さて、わざわざこんなところに何をしに来たのかというところ……。

「やっぱり、居ましたね」

実の所、さつきから少しだけ嫌な予感がしていたんだ。それで海側を歩いていたら……案の定、俺の標準装備である13号電探に反応があつたわけで。

おまけに、ソナーにまで反応がある。

「潜水艦3に駆逐艦2、軽巡洋艦1……艦影は北東ですか」

我ながらさすがの運の良さといふかなんというか、こういう時の勘は本当によく当たる。

にしても軽量艦だけで本当に良かったな……駆逐艦や軽巡洋艦ならまだしも、それ以上のエリート級の重量艦がこられたら流石の俺でも危なかつた。

フラグシップ級や姫、鬼は……まあ、流石にこんな前線まで来ないだろうから、今は考えなくてもいいだろう。

「雪風、出撃します」

一度、吸って吐いてを繰り返してから意気込むように胸の前に握りこぶしを作り、ぐつとガッツポーズをとる。

うん、やつぱり雪風可愛い……今か日本人が、緊張を紛らわせるために毎度の出撃前に行うルーティンと言えば良いだろうか。

ともかく、いくら愉悦のためと言っても俺は痛いのは嫌だし、本音を言えば死ぬのも怖い。

だから、意外とこのルーティンは俺の助けになってくれている……と思う。

幸いにも、爆雷の残弾はまだ残っている。

この世界はゲームと違って、装備スロットなんてものが存在しないので、装備出来る武器種に制限はないし、主砲連撃だったりも自前の腕前でなんとかなったりはする。

ただ、当然ながら弾切れとかはあるわけだから、その辺りは定期的に点検する必要がある。

でもそれ以上に、今回は俺が艤装を常に装備してたから良かったけど、これ下手したらまじで基地が直接攻撃されてたんじやないか？

流星に基地まで攻撃が届くことはないと思うけど、今は艦娘達もみんな歓迎会に居るだろうし。

それよりも、いくらなんでもタイミングが良すぎるな。

まるで、基地内部に深海棲艦の内通者がいるかのような早さなんだが……いや、そんなことは有り得ないか。

例えば姫や鬼みたいな意思疎通が取れそうな深海棲艦であっても、実際はまともに会話も出来ないような奴らばっかだからな。

とにかく、今はこいつらを駆除することを優先しないと。

さて、そうと決まれば……と主砲を構えたところで、俺の全身を嫌な予感が襲いかかった。

半ば直感的に垂直に駆動すると、俺の居た地点を主砲のものと思わ

しき弾丸が通り過ぎた。

「何が……?」

今のは、多分巡洋艦が使う主砲の砲撃、だったと思う。

問題は、弾速が明らかに軽巡洋艦の速度ではなかったことだろう。

俺ははっとなって、もう一度電探を確認してみる。

気が付けば、敵艦の数が3つ程増えていた。

というかこれ、状況的に見ても誘われたのでは？

「もしかして、夜闇に紛れて海中から……!?!」

深海棲艦は、海からやってくる。

その話は艦娘なら常識なくらいではあるけど、今まで赤くなった海域以外、つまり普通の海の中から潜って現れるなんて、聞いたことがなかったのに！

俺は急いで腰の探照灯のライトをつける。

本来ならこんなバックアップもない状況探照灯なんていい的になるだけの話だが、敵や敵弾がほとんど目視出来ないまま勘に任せて避け続けるよりはマシだろう。

「ソノトオリダ、ヒメヨ」

「!? 誰ですか!」

いきなり俺以外の声が聴こえてきたことで、俺は警戒を怠ることなく声の主を見るべくそちらに振り返った。

そして、照らされた探照灯の先から現れたのは……全身から淡く黄色いオーラを立ち昇らせる重巡り級。

おまけに、その目は小さく青い炎のようなものが揺らめいていた。

「リ級の改フラグシップ!?　なんでこんなところに……いや、そんなことよりも」

リ級の、それも改フラグシップなんていう厄介な敵が現れたことは明らかに異常だし、緊急事態と言わざるをえないだろう。

ただ、それすらも上回るほどの驚きが他にもあった。

「ソナニワタシガシヤベルノガオドロキカ……ヒメヨ」

「その、さつきから姫っていうのは一体なんなんですか?」

ニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべながら姫と呼ぶリ級に、俺は薄ら寒いものを覚えた。

これでも元々男なんだぞ……姫呼ばわりは流石に鳥肌もんだわ。

「フム?　モシヤ、キガツイテイナイノカ?」

「なんの話でしょうか。それよりも、さつきと帰ってはいただけないでしょうか」

首を捻るリ級に、俺は無表情のままそう返した。

流石にこれでうんとは言わないだろうが、この状況はあまりにも分が悪い。

愉悦なんて言ってもらえる暇はないし、このまま時間稼ぎをしていたら艦娘部隊だってやってくるはずだ。

「イイゾ」

……は?

「タダシ、ヒメ……イヤ、ユキカゼヨ。オマエニハワタシタチニツイテキテモラウ」

「どういうことですか?」

あつさり了承したかと思えば、今度は要領を得ないことを言い出す
り級。

「ドウイウコトモナイ。オマエニハワタシタチノナカマニナレ」

……何を言ってるんだ、こいつは。

そんなこと、到底許されるものじゃない。

「断ります。私はここ、舞鶴の雪風で、艦娘ですから」

そんなことをしたら、間近で提督の愉悦が楽しめないじゃないか！

確かに、寝返ったことで最初は提督の愉悦を楽しめるかもしれないが、
い。

けど、そこまででしかない。

その愉悦の先にあるものは、愉悦ではなく憎悪でしかない。

そんなものは、俺の座右の銘「生涯愉悦」に反するという他ない。

「ソウカ……デハ、ムリニデモシズメテツレテイクトシヨウ！」

り級が叫んだと同時に、左右両方向からほぼ同時に砲撃音が聴こえてくる。咄嗟に後ろに下がることで回避すると、敵艦隊により放たれた弾は俺の目の前を通り過ぎ、夾叉した。

俺は後ろに下がりながら、弾道を予測してまずは左側の敵艦が居るだろう方向に主砲を向け……発射する。

左目の見えない俺としちゃ、一番厄介なのは死角からの攻撃だった。多分駆逐艦なんだろうけど、それでも油断していいもんじゃない。
い。

最初の数発は撃ち漏らしたものの、何発かして離れたところから爆煙が上がった。

しかし、それからはしばらく敵艦を撃破することが出来ず、膠着状態が続いた。

残りは駆逐艦……さつき視界にちらと見えた限りではあるが、恐らく口級のエリートだろう。

あとは軽巡洋艦ホ級エリートと、潜姿は見えないが、さつきから潜水艦の雷撃も何度かとんで来ている。

今のところ被弾はないものの、流石に単騎では回避するのが精一杯な上に潜水艦からの攻撃も警戒しているせいで、反撃の隙すら見えない。

元より攻撃が得意なタイプではなかったのもあって、完全に攻めあぐねていた。

と、その時。

「雪風！」

聞き覚えのある声が、後ろから……思っていたよりも近くから、聴こえてきた。

俺が攻めきれないでいる間に、いつの間にか鎮守府付近まで後退してしまっていたようだ……って、いやいや！

護衛もなしになにやってんのあの提督^{バカ}!?

悪態をついていると、視界の端で探照灯に照らされたり級の口角が上がっているのが見えた。

あ、これやばい（確信）

「司令官?! ……危ない！」

咄嗟に、提督と主砲を構えたり級の射線上に身体を差し込む。

瞬間、全身に強い衝撃が襲いかかった。

感覚的に自分が今吹き飛んでいるのが分かるものの、正直風圧がすごすぎて、何とか出来る余裕がない。

痛くはないんだけど、これはちよつと気持ち悪いな。

重巡の、それも改フラグシップクラスの主砲をこんな真つ向から受けたことなんかなかったから、さながらアスレチックのような感覚と言えばいいか……やべえ、なんか想像したら笑えてきたんだけど。

すごい勢いで吹き飛んだ俺は、跳ねるように海面に叩きつけられながら最終的に埠頭に打ち上げられた。

身体を動かしてみようとするが、右腕を少し動かすだけで違和感が生じる。

口からも血を吐いてるし、ただでさえ血まみれだった全身がもはや真つ赤である……あれ、これ俺マジで死ぬのでは？

「雪風！ 雪風え！ おい、大丈夫か！ しつかりしろ！」

いつの間にか近付いてきていたのか、提督が必死に俺の名前を叫びながら呼びかけてくる。

その声を聞いて、俺はふと今の状況をようやく思い出した……まさに、曇らせには最高なタイミングではないか？

それを理解した瞬間、無意識というかなんというか、俺は立ち上がった。

自分でもまともに動くことも出来ない状態なのは分かっている。

右腕と右足は完全に折れていて、腹部からは正直やばいくらいの血が出てるのがわかる……見なかったことにしよう。

しかし、今の状況はどうだ？

満身創痍の雪風に、すぐ傍で心配げに寄り添う提督……全く、最高

のシチュエーションではないか!

反射的に両手の主砲を前に向けると、飛来していた弾頭に向けて同時に発射し、二発の弾を同時にぶつけて撃ち落とす。

「しれえは……本当に、皆を護ってくださいか?」

「……当たり前だろ。それが、俺がここに来た理由で、俺が存在する理由でもあるんだ。ひとつの組織を率いる者としては、当然だろう」

よく見えないが、提督がどうやら本気で言っているのはよく分かった。

本当にそのつもりで言っている人間が、一体どれだけいることか。

「ではしれえ、これからその言葉を、証明し続けてください。雪風はいつでも、見ていますから」

「雪風?」

俺はなんとか、多分提督が居るだろう方向に向けて微笑んでやると、艦装との同期を深めて再び、埠頭から海へと飛び下りた。

全ての砲塔が、俺の方へと向けられる。

「待て、雪風! それ以上は……」

「大丈夫ですよ、司令……本当の雪風はここでは沈みませんから」

大丈夫大丈夫、避けるくらいなら今のままでも……。

なんて思っていたら、海面に着地した瞬間、膝ががくんと崩れ落ちるように折れる。

つていやいや、やばいつて!?

一箇所に集まったことで、駆逐口級が、軽巡ホ級が、重巡リ級が、探照灯に照らされたことでぼやけたその輪郭を映し出していた。
やべえ、詰んだ。

「雪風は頑張れたでしょうか。皆を護れたでしょうか」

この時、テンパリからか、俺は自分でも何を言っているのかも分かっていなかった。

「しれえ、雪風も……今、そっちに行きます」

何かを呟いた、直後。

駆逐口級が爆発を起こした。

「総員！ 配置につけ！ 目標は旗艦、リ級だ！ 小規模部隊とはいえ、油断するな……てえ！」

この声は、長門さんだろうか。

声と共に、発砲音が至るところから鳴り渡る。

丁度、援軍が間に合ったらしい。

「グッ！ オノレ、カンムスメガ！ コノバハテツタイスルシカ……！」

初めて、リ級が焦っている声を聞いたような気がする。

もうほとんど目が見えていないせいで、状況はさっぱりだが。

「ヒメヨ、イツカワレワレノモトニクルノヲタノシミニシテイルゾ！」

その声を最後に、しばらく発砲音と機雷の爆発の音だけが鳴り続け……少しして、ようやくくなりやんだ。

「雪風、無事か!？」

やっぱりこの声は長門さんか。

無事を知らせるべく海面に膝をついたままの足でなんとか立とうとして。

俺の身体は、そのまま海面へと倒れ込んだ……あれ？

「雪風!？」

まるで悲鳴をあげるような時津風の声か、妙にはつきり聴こえてくる。

困ったな、身体が動きそうにない。

まあ、このままでいれば勝手に誰かが運んでくれるだろう。

人頼みで悪いとは思うけども、動かないんだから仕方ないしな。

それよりも、さつきから眠い……いつぞ、このまま寝てしまおうか。

「しっかりしてよ、雪風! 死なないで!」

心配するなつて、時津風。

ちよつと寝るだけだから、な？

そんなことを考えながら、呑気にも俺はそのまま目を閉じて意識を落として行つた……本当に死なないよね？

大本営の雪風（提督 side）

「しっかりとしてよ、雪風！ 死なないで！」

必死に声を張り上げて、すっかり全身が傷だらけで意識を落としていた雪風に涙ながらに縋り付く時津風。彼女は確か……雪風と同室の子だったか。

「……提督、後で話がある」

一方、深海棲艦の殲滅を終えたらしい長門は、俺に向けて鋭い視線を向けつつ少し声を震わせながらそんなことを言うと、後は何も言わずに鎮守府の方へと戻って行った。まるで怒りを押し殺したように見えた長門の言葉に、俺は拳を握り締めた。

——なんだ、この体たらくは。

あまりにも迂闊な己の行動に、俺は狂いたくなるほどの後悔を覚える。さつきは何も言わなかったが、あの目は怒りに打ち震えていた。

雪風が倒れたのは、間違いなく俺のせいだ。俺が居なければ、雪風だけであれば、間違いなく勝てた戦いだったはずだ。

この鎮守府で最も階級が高く、そして唯一指示を出せる立場の俺が何をやっているんだ？ 俺が、俺だけが足手まといじゃないか……！

「提督」

俯く俺に向けて呼び掛ける声。そんな声を聴いて顔を上げると、そこには……弓を持ったまま、少し微笑んでいる鳳翔だった。

しかしこここの鳳翔は俺の知る何もかもを抱擁してくれそうな雰囲気、醸していた士官学校の鳳翔とは違い、明らかに少しやつれており、表情からはあまり余裕を感じられないほどに疲れきっていた。

「鳳翔か……どうした？ 戻らないのか？」

「私は護衛です……と言っても、旧型なので、お力になれるかは分かりませんが」

鳳翔に言われ、俺は再び馬鹿を示してしまったことに気付く。ついさっきまで深海棲艦に襲われたばかりだというのに、また一人で行動しようとしていた浅慮さに、つくづく無能だと感じざるを得ない。

が、それはそれとして鳳翔の自虐に関しては話は別だ。彼女の目には、諦観が映っていた。

「それは違う。俺の居た士官学校にも鳳翔は居たが、厳しい訓練に疲れきった俺たちを、手心加えて癒してくれた……ここの君のことはよく知らないが、だからと言って君が力のない存在、なんてことはないはずだ。それに君は、全ての空母の母だろうか？」

それを言うと、俺なんかは役に立っていないどころかむしろ足を引っ張っているくらいだ。現状、邪魔になっている俺よりはマシだろう。

それにしても、我ながらちよつと食い気味になってしまったかもしれない。まあ、士官学校では本当に鳳翔からは色々助けられたから、本音ではあるのだが。

少し心配になって見ていると、鳳翔は少しの間驚いた表情で固まった後、くすくすと小さく笑い声を漏らした。

「そう、ですか……提督、ありがとうございます」

どうやら引かれはしなかったらしい。心なしか、鳳翔の表情もさつきより少し安らいでいるように見える。

「提督。端的に言つて、艦娘が戦闘に集中している傍での注意を引く

行動、及び味方の集中力を損なうような行動。端的に言えば、とても浅慮としか言えません」

「お、おお……」

いきなりの核心を突いた鳳翔の言い分に、つい圧倒されるように呻き声だけが洩れる。自覚はしている……むしろ、痛感させられているだけに、それを人に言われると、やっぱり衝撃は大きい。

だが、ここは甘んじて受けねば……そう思い次の諫言を待っている、鳳翔はいきなり俯くと「ですが」と続けた。

「それは、今までの私達も同じでした。いえ、むしろ私達の方が過ちとしては大きいかもしれません。提督の指示に逆らえないから、自分ではどうにもならないからと、あの子……雪風ちゃんに私達は八つ当たりしてしまっていました」

この鎮守府に残っていた過去の出撃記録を確認すると、雪風と同じ編隊の子だけ、轟沈数が圧倒的に少なかった。雪風と言えば、よく幸運艦だという話を聞くのだが、果たしてそれは本当だろうか？

俺は、初めて雪風の出撃記録を見た時、まるで信じられないものを見たかのように驚いたものだ。なにせ、雪風だけが圧倒的に出撃回数が多かったからだ。他のほとんどの艦娘と比較しても《3倍以上もの出撃回数》を重ねてきた雪風は、本当に幸運だったと言えるのか？

雪風はよく、前提督に呼ばれていたと聞く。その内容を知っている艦娘はほとんど居ないようだし、長門達に聞いても教えてくれなかったが、それが理由で雪風は提督に気に入られているのではないかと他の艦娘が疑心していたのが、雪風への不当な風当たりの原因のひとつだと言っていた。

「だから、提督。もし雪風ちゃんが起きたら、一緒に謝りに行きましょう。そして……次からは、もう皆で間違えないようにしましょうね」

「そう、か。そうだな」

そう言って、鳳翔さんは俺のよく知る彼女と同じ、優しい微笑みを浮かべた。

「ああ、でも提督。長門さんからのお叱りはしつかり受けてくださいね？ 長門さんも、提督には期待していましたから」

「ああ、分かっているさ……さて、鎮守府に戻ろうか」

ここで俺が逃げ出せば、長門はおろか、全ての艦娘からの期待が失望に変わるのには容易に想像出来る。それに、鳳翔に許しを貰ったとしても、それとこれとは話が別だ。今回に限っては、間違いなく俺が全て悪いことには違いなのだから。

鳳翔を伴って少し雪風の見舞いに寄ってから俺の執務室へ戻ってくると、鳳翔は「雪風ちゃん起きた時のために食べ物を作ってあげたいので」と、そのまま別れた。やっぱり、あの細やかな心配りが出来るところが鳳翔の本当の良さだと常々思う。例え艦娘と関係を築けたとしても、俺には出来ないことだ。

さて、ともうすつかり歓迎会の空気でもなくなったこともあって、書類でも纏めようかと考えた時、内線が部屋に鳴り響いた。

一体誰から……と逡巡したが、そもそもこの部屋の回線にアポもなしに直接かけてくる人はたった一人しか居ないことに気付き、俺は慌てて受話器を取った。

「もしもし……朝倉少佐です。お疲れ様です」

『ああ、お疲れ様。朝倉くん』

俺の予想通り、電話に出た先から聴こえてきた相手の声は、なんと、現在日本海軍において最高位に位置し、大本営で忙しくしているはずの嘉村聡一郎元帥だった。

この人は俺にとっては何人であり……そして、俺とは薄くではあるが血の繋がった叔父でもある。

俺がこうして少佐として指揮するために手配したのも、何を隠そうこの人だ。俺を評価してこの鎮守府を任せてくれたとは言っていたものの、言い方は悪いが、正直七光りなものも否定出来ない事実だと思う。だからこそ、俺はしっかりと結果で示そうとこれから奮闘していく所存である。

「して、今回はどちらの要件で？」

『いや、君の沙汰はどうかと思ってな。まあ、近況報告のような世間話ととってもらっても構わない……で、どうだ？ 艦娘達とは、上手くいっているのか？』

その言葉に、俺は少し言葉を詰まらせる。が、俺は正直に全てを話すことにした。

着任当時の艦娘たちは、余程悲惨な状態であったこと。艦娘たちからは警戒されていること。そして、今までの雪風の状態……俺が今日犯してしまった失態まで、掻い摘んだところはあれど、しっかりと話した。

全てを聞いた元帥は、ううむと声を低くして唸った。

『なるほど……その失態は、完全に君の過失と言ってもいいだろう。艦娘たちとの信頼にも大きく影響を及ぼす可能性もある。それで、雪風は大丈夫だったか？』

「状態としては意識不明の重体ではありますが、幸いにも命には別状がないらしく、すぐさま高速修復剤入りのお風呂に入渠した後、医務室で寝かせています」

俺も医務室でそれを聞いた時は、心底安堵したものだ。もし雪風に何があれば……俺は、自分の命で償いたくなるほどには後悔で埋め尽くされていただろう。

報告を聞いた元帥は、ふうと息を吐いた。もしかして、元帥も安心したのだろうか。やっぱり、あの時見たものといい、元帥にとって艦娘は特別な存在なのかもしれない。

『そう、か。それにしても、まさか君も私と同じとはな』

「も？ 同じ、とは？」

何処か懐かしむような声で呟く元帥に、俺は反射的に聞き返してしまふ。それが元帥の気に障るかもしれないと思いつき、電話を隔てているのにも関わらず、全力で頭を下げながら謝罪する。

「す、すみません！ 差し出がましい口を&……！」

『いや、良い。今のは気になつても仕方がないだろう。時に、朝倉くん。私の指のものを、見たことはあるかね？』

「え？ は、はい。ケツコンカツコカリの指輪、でしたよね？」

確か、強い絆を結んだ艦娘とだけが交換することができ、その艦娘の潜在能力を引き出すことが出来るものだったと記憶している。

相当な信頼がないと効果を成さない上に、そもそも指輪を1つ作るだけでもかなりの資材量を要求されるらしく、成果が認められた鎮守府に対して、たったひとつだけを支給されると教わった。

『そうだ。で、その相手こそ、私の鎮守府の主力艦の一人だった艦娘、雪風なのだ』

「元帥のケツコンカツコカリの相手が……雪風、ですか？」

正直、まさかとは思った。かつて、最強の艦隊を持っていたと言われている元帥のケツコンカツコカリ艦が、雪風だなんて。

『それだけではないぞ。私がまだ鎮守府に着任して間もない頃だ。当時、秘書艦を務めていた雪風と共に空いた時間に釣りをしていた際、

突如現れた深海棲艦に襲われたことがあった。その時は雪風が単騎で応戦したものの、辛抱ならなかった俺がつい雪風の名前を呼んでしまい、そのせいで深海棲艦の気を引いてしまった私に飛んできた砲撃を、雪風が庇って受けてしまったのだ』

「それは……確かに、私と同じですね」

続く元帥のエピソードに、俺は絶句するばかりだった。なにしろ、語られる内容が、前後に何をしてたのか以外はそのまま俺と全く同じだったからだ。

「それで、その雪風は今はどこに？」

『……2年ほど前のことだ。君もよく知るあの大作戦に出撃し、そのまま帰ってこなかった』

2年前の作戦と言えば、ガダルカナル島とその周辺海域を制圧していた深海棲艦の掃討のことだろう。あの戦いの時はまだ俺は幹部候補として士官学校に居たのだが、多大な犠牲を払いつつもなんとか作戦を成功させたという話は耳にしたことがある。その功績をもって、当時の作戦の最高指揮者であった嘉村元帥は、大将から昇格したのだった。

明らかに沈んだ様子の方に、俺は何も声を掛けられなかった。つまり、元帥は最も信頼していた艦娘を、喪っていたということなのだから。

俺にはまだ理解出来ない感情を慰める術を、俺は持ち合わせてはいなかった。

『すまないな。このような、重い話をしてしまった』
「いえ、とても貴重なお話を聞くことが出来ました」

元帥のこの話は、俺にも有り得ない話ではない。提督として指揮を執る以上、同じような決断を迫られることは今後間違いなく壁として

訪れるだろう。俺はその時、気持ちを確かにしていられるだろうか……。

『長話に付き合わせてしまったな。雪風は、ああ見えてかなり思慮深く、そして人一倍仲間想いの艦娘と言つていいだろう。もし何かあれば、いつでも私に連絡をくれるといい』

「はい、ありがとうございました」

流石に余程なことがない限り元帥に直接かけることはないだろうが、それでも為になる話を聞くことが出来た。

『ああ、そうだ。私以外にも、2人ほど雪風と特別仲の良かった人が居る。奴らは大本営の開発部に勤めているが故、興味があれば話を聞いてみるのもいいだろう。名前は——』

最後にその2人の名前を言い残した後、元帥は回線を切った。

俺は緊張から息を吐き、崩れ落ちるように椅子へと座り込んだ。

「開発部責任者の草鹿瑛介くさがえいすけさん。それと……」

元帥から聞いた、その名前。何故あのタイミングでと思ったが、不思議と忘れてはいけない、そんな気がして2人の名前を反芻する。

「元帥の大親友だった人の妹、雪波小夜ゆきなみさよさん、か……」

泡沫の夢（三人称 side）

とあるなんでもない日の昼下がり。

「司令！ 雪風、帰ってきました！」

「ああ、お帰り。MVPは……相変わらず、雪風か。本当、雪風が出たら毎回MVPを持っていくな、お前は。いつそのこと、一回雪風を主力艦隊から外してみるか？」

「ええっ!?! 司令官、それはないですよ！ 私だって、頑張ったのに！」

「いや、冗談だからな？ だが、そろそろ雪風も前線から戻ってきた方が……」

敬礼の形を取り戦果報告を終える雪風に提督は呆れるように言うと、雪風がぎよつとした風に反抗する。

この場には他にも数人艦娘が居るが、特に何かを言う様子もなく、むしろ微笑まじげに見守るだけに留めている。

それも当然のことで、この鎮守府に所属している艦娘や人間は全員、2人の関係をよく知っているからだ。

智略と慧眼をもって今まで深海棲艦によって侵略されてきたあらゆる海域を制圧してきた全鎮守府でも最も大きな艦隊を擁する嘉村大将。そんな彼を艦隊結成における最初期から支え続け、今なお駆逐艦でありながら数多の戦場を駆け、鎮守府内においては最強の練度を持つ雪風。

その2人の薬指には、重厚に光沢を放つケツコンカツコカリの指輪がはめられていた。

この2人の間には信頼すらも超越する程の確固たる絆が存在することは、少しでも2人のことを知っている人間、及び艦娘であれば誰でも知っている。よって、2人の絆の間に介入しようとするような者は、この鎮守府においては誰一人として居なかった。尤も、外部ではロリコン提督などという噂が流されていることには、智略に長けた嘉

村でおつても頭を抱えていたが。

そんな2人が変に和やかな空気でいがみ合っている中、執務室の戸を叩く音が鳴る。返事もないというのに遠慮なしに書類の束を持って部屋に入ってきたその人は、鎮守府では比較的珍しい人間の女性であり、嘉村にとつては昔馴染みの人物である鎮守府における工作部門における主任を担当している雪波小夜。その隣には工作部門の工作長の明石と、その助手である夕張も並んでいた。

「嘉村大将……って、また子供みたいな言い争いですか。いい加減、口に出したらどうですか？ 俺の秘書艦としてずっと居てくれて」

「雪波……お前は一体何を言っているんだ。雪風は戦略的に必要な存在なんだ。いざという時のために、万全で居てもらった方がうちとしては安心材料になり得るんだ」

「努めて冷静そうに言ってますけど、顔は真っ赤だし声もちよつと震えてますからね？ まあ、今回はそういうことにしときますが」

提督の面子として最低限の威厳は残そうとしているのだろうが、周りから見れば普通にバレバレである。作戦行動となると常に威厳のある人なのだが、プライベートとなるといつもこうやって脇が甘くなってしまうのが、嘉村であった。そんな上官であるからこそ、艦娘たちは皆嘉村を慕っているのだが。

雪波と呼ばれた女性に凶星を指された嘉村は、む、と微かに呻き声を漏らす。

「司令。雪風は、皆を護りたいんです。だから、外さないでください」

「雪風……だが、もしお前に万が一のことがあれば……」

「大丈夫です、司令。雪風は、沈みませんから」

真剣な目で訴える雪風に、嘉村は額を揉みながら眉間に皺を寄せるが、しようがないとばかりに大きく溜め息を吐いて天を仰いだ。

「全く、その何処が根拠になると言うんだ……だが、雪風の言葉であれば信頼は出来る。これからも、皆を頼むぞ」

「はい！ しれえー！」

そんな会話を興味深げに見ていた雪波だったが、会話が終わったと分かると、手に持っていた書類を実務机の上に並べた。

「茶番が終わったみたいなので、私からも報告です。まず、次の作戦に必要なとされる反抗作戦における陸上基地殲滅のためのファクターとなる大発動艇、及び三式弾ですが、必要分の装備の開発には成功しました。今回は妖精さんの気まぐれもかなりいい方向に働いてくれましたね」

「おお、そうか。それなら次の作戦には雪風が居なくても……」
「司令？」

雪波の一つ目の報告を聞いたその場の艦娘たちのうち幾人かが、おお、と感嘆の声を漏らした。夕張などは「私もやったりますよ！」と意気込んでいる。実際、ここに今居るメンバーは誰も彼もが艦隊でも精鋭の艦娘ばかりであり、中でも声をあげた艦娘は開発された上2つを装備出来るため、意気込んでいるのだろう。きつと、この場に長門が居たら「胸が熱くなるな」なんて言っていたに違いない。

そんな報告を受けて喜色の浮かぶ表情に変わってつい言葉が漏れそうになったところで雪風から鋭い視線を受け、嘉村はすぐさま口を噤んだ。この人はやっぱり学ばない、と雪波も若干呆れながら、報告を続ける。

「第二に、数人の艦娘の改二改装の目処が立ちました。その中には、雪風も含まれています。良かったですね、嘉村大将」

「ふむ。そう、だな」

だが今回の報告に、嘉村は喜びを示さなかった。

「珍しい。嬉しくないんですか？」

「ん？ ああ、いや。嬉しいことには嬉しい。が、こうして雪風が強くなってしまえば、より一層前線への配備が増えることだろう。確かに、強くなることには強くなる。が、やはりリスクも増える」

ただでさえ艦隊のエースである雪風が強くなってしまえば、出撃の回数は間違いなく増えることを危惧しているようだった。対潜、滞空、対地、それに対海上性能のどれが上がったとしても、要は運用方法が増えるだけで、結果的にはリスクが上がったも同然なのだ。これには、雪波も確かにと納得がいった。

雪波にとつては、雪風はとても大切な存在だ。いや、むしろある意味では嘉村以上に雪風を想っているし、もし雪風に何かあれば、嘉村と同じくらいには深い喪失感を覚えるだろう。むしろ、雪風との付き合いで言うのなら嘉村よりも長いのだから。

が、雪風がだからと言って退いてくれるわけがないのは、2人にとつてもよく分かっていた。

「やった！ じゃあ、雪風ももつと強く、しつかり皆を護れるようになるんですね！」

「そういう訳ではあるが……自分が改造されることに恐怖はないのか？ まあ、もう改造は前にも受けてはいたし、そういう所が艦娘たる所以なんだろうが」

すつかり変わったな、とぼやく提督に、首をかしげる雪風。

「確かに変わった自覚はありますけど、しれえ程じゃないですよね？」

ほら、白髪だってこんなに増えていますし」

「余計なお世話だ。というか、一体いつと較べているんだ。俺ももう、

50だぞ」

「あー。確かに、嘉村大將は皺も白髪も増えましたよね。性格の方は昔と変わらず、ちよつとどころかかなり子供っぽいですけど」

「ほう？ お前だって、昔はよく俺の事をお兄ちゃんだとか呼んでいたじゃないか。なあ、もう1回呼んでくれてもいいんだぞ？ 小夜ちゃん？」

「セクハラを受けたと、後で本営と、同艦隊所属の艦娘たちに報告を打電しておきますね。それに、私にとつての兄は一人だけなので」

「……流石にそれは理不尽ではないか？ いやまあ、それはそうだが」

一転して少し引き気味に顔を引き攣らせる嘉村だが、周囲の艦娘からの視線はさつきと違い冷たいものになっていることに気がついていない。

こういう時の鈍さはかつての兄に似ているな、なんて雪波は考えていた。

「……ですが、雪風の改装については次の作戦までには間に合わない試算です」

「そうか。確かに雪風の改二の力は惜しいが、仕方ない。そんなものがなくとも、次の作戦で大勝利……いつも通りの全員生還。それを目指すだけだ」

そこで言葉を一度切った嘉村は、貫禄のある真剣な表情を浮かべて、改めてその場に居る艦娘と、雪波の顔を見る。

「次の作戦の成否によって、我々の悲願であるソロモン海域奪取作戦の今後を左右すると言っても過言ではない。分かるな？」

「そう言うと、全員が頷く。

よし、と提督も同様に首を縦に振ると、机の上に海域図を広げた。

「まずは掻い摘んだ内容になるが、大まかな作戦要項を説明する。まずはこちら、敵の前線基地となっているマライタの制圧、その後速やかにツラギ、フロリダと進出し、そして……」

ひとつひとつ、指でなぞるように動かしていき、最後に。

「ここ、恐らく敵の大要衝となっているだろう、ガダルカナルを叩く」

後に、過去に類を見ない程の対地侵略戦と呼ばれるまでになった、ガダルカナル侵攻作戦。

そこで、嘉村は見事作戦に成功し、元帥へと昇格を果たすが、代わりにもっと大事なものを失ってしまうことを、この時は分かっていた。なかった。